# 笠原白翁（かさはらはくおう）

1809年～1880年

**江戸末期、福井で最初の蘭方医。恐ろしい伝染病の天然痘予防のために命がけで福井城下へ種痘のワクチンを運び種痘を広めた先駆者。**

どんな子だった？

## 福井藩の医学所で学び、当初は漢方医を目指して江戸へ

天然痘の予防に力を注いだ笠原白翁は、文化6（1809）年、開業医を営む笠原竜斎の子として、足羽郡深見村（福井市深見町）で生まれました。本名は笠原良策、幼い頃の名は良といいました。

幼い頃のことはあまりわかっていませんが、15歳の頃、良策は福井藩の医学所「済世館」に入り、漢方医学を学びます。そして、21歳からは、江戸で磯野公道から漢方を主軸とした古医方を学び、天保3（1832）年、24歳の時に福井へ戻り、福井城下の木田町（福井市木田町）で医者の仕事を始めます。

episode 1

## 漢方医から蘭方医へ。そして、天然痘予防を知ると…

良策は当初、漢方医でしたが、28歳の時、加賀の蘭方医大武了玄との出会いによって、西洋医学の素晴らしさを知り、強い興味を持ちました。その思いが断ち切れない良策は、ついに京都へ出て、当時の蘭方医の第一人者であった日野鼎哉に入門。32歳にして西洋の医学を勉強し始めます。

弘化2（1845）年、良策は、清（中国）の書物からイギリスのジェンナーが開発した天然痘の予防方法を知ります。天然痘は強い伝染力を持ち、高熱と発疹が何日も続き、とくに子どもの死亡率が高い病気として恐れられていました。幕末には天然痘が毎年のように流行し、福井城下でも多くの人命が奪われていました。良策の生涯を小説化した『雪の花』に、天然痘が猛威をふるった福井城下の様子が描かれています。

福井の町では、天然痘の流行が一層激しさを加え、路上には間断なく棺をのせた大八車が、乾いた車輪の音を立てて走った。町角で大八車同士が衝突して棺から死体が路上にころがり出たという事故も起こった。

大八車は、町の中を明里処刑場の方向に走り、いつもは馬も車も人も通らない雑草のしげるせまい道は、車の輪と人のわらじにふみしだかれ赤土の露出した道になっていた。処刑場の裏手では、昼も夜も絶えることなく煙が幾筋も立ちのぼっていた。その道を見下ろす川の土手の上に、しばしば姿をみせる

ゆかりの地
（県内）福井市　越前市ほか
（県外）京都府京都市

写真提供：福井市立郷土歴史博物館所蔵

二十七、八歳の男がいた。男は身じろぎもせず立っていた。痩せた長身の男で、彫りのふかい日焼けした顔には鋭い眼が光っていた。福井の町医笠原良策であった。

《吉村昭著『雪の花』より》

ジェンナーが開発した予防法は、痘苗（ワクチン）を人に接種し、免疫をつくる「種痘法」というものでした。良策はその痘苗を取り寄せようと、藩に輸入の請願書を提出。輸入費用は自分がもつとまで述べますが、いくら待っても返事がきません。そこで、藩医をしていた友人を介し、直接、藩主の松平春嶽（P124参照）に請願書を提出し、ようやく春嶽を通じて幕府への出願が叶います。いよいよ、良策がその後の半生をかける天然痘との戦いが始まりました。

episode 2

# 天然痘の痘苗（ワクチン）を生きたまま福井へ

良策は清（中国）にある痘苗を取り寄せる手配をして、嘉永元（1848）年10月、それを受け取るために長崎へ旅立ちます。ところが、中国の痘苗が長崎に届く前に、オランダからのものが長崎の小児に接種されて成功し、良策が旅立つ少し前には、良策の師である京都の日野鼎哉のもとに、その痘苗が送られていました。現代のような情報網のない時代のこと、良策が長崎へ向かう途中に日野を訪れると、そこに痘苗があったのです。良策は、京都で接種を手伝い、そして、1月余り後、福井へ痘苗を持ち帰ることになりますが、そこには決死の旅が待ち構えていました。

痘苗は、膿が固まった痘痂で京都まで運ばれましたが、痘苗が死んでしまう可能性が高いため、良策は、それより確実な方法をとります。それは、人から人へ植え継いで痘苗を生きたまま運ぶ方法でした。

良策は、2人の子どもに接種し、発症を見定めたうえで子どもとその親を連れ、11月16日、京都を出発。旧暦11月は真冬です。1メートル以上の雪が積もる危険な峠越えが待っていました。一行は今庄（南越前町今庄）の峠で吹雪に見舞われ、一歩も前に進めなくなってしまいます。あわや遭難という時に、板取宿（南越前町今庄板取）の村人に救出されました。

今庄には痘苗を引き継ぐために、府中城下（越前市）の医師3人が、我が子を連れて待っていました。子どもの中には、後に初代帝国大学（東京大学）総長となった渡辺洪基（P144参照）もいました。良策はその子どもたちに、京都から連れてきた子どもたちの膿を植え付け、福井城下へ生きたままの痘苗を運びます。

こうして種痘は良策の熱意によって、越前にもたらされ、福井に除痘館が設置されますが、当初は予防という考え方が浸透せず、種痘をすると牛になるというデマもとび交い、なかなか普及しませんでした。ところが、除痘館ができた翌年、天然痘が大流行し、種痘をした子どもは、天然痘に感染することはありませんでした。これをきっかけに種痘は急速に受け入れられ、金沢や富山にも普及。良策は後に『牛痘鑑法』を著し、広くその方法を伝えています。また、その校閲には友人で歌人の橘曙覧（P108参照）が携わっています。

※種痘…牛が罹る牛痘の膿を用いた痘苗（ワクチン）を人に植え付け、軽い牛痘に罹ることで、天然痘の免疫をつくる予防方法。

## check for 笠原 白翁


吉村昭『雪の花』新潮社
白崎昭一郎『白崎昭一郎作品集 I』
『由利公正生誕 180 年記念・笠原白翁生誕 200 年記念歴史講座講演録』
歴史のみえるまちづくり協会
津田進三『黒川良安と笠原良策　加賀藩の種痘』杏林温故会
『福井県史』通史編 4 近世二　福井県
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第 3 集　青少年育成福井県民会議
『これき人物シリーズ 3　ふくいの先人たち　幕末』福井県立こども歴史文化館


こぼれ話

良策が種痘の術式を記した『白神記』という著書があります。「白神」とは、「ワクチン」の英語やドイツ語の発音「ヴァクスィン」を良策が日本語表記したものです。恐ろしい天然痘から人々を救う、まさに神の文字がぴったりと合うようです。また、「白翁」という号は、著書名の「白」からとっています。

# 三国幽眠（三国大学）

1810年～1896年

**豪商の子でありながら苦学を志し儒学者となり、尊王攘夷派と交わる。安政の大獄では追放刑を受けるが維新後は教部省などに勤める。**

どんな子だった？

## 商売よりも、とにかく勉強が好き

幽眠（大学）は、越前国三国の豪商、森与兵衛の三男として生まれました。本名を直準、後に大学と改名し、55歳で出家して幽眠と名乗りました。

商売より学問に強く惹かれた幽眠は、16歳になると生家に近い性海寺（坂井市三国町南本町）で漢文を習い始めます。その後、実家を離れて近江国彦根の儒学者中川漁村に入門し、あえて貧しい生活に身を置いて勉学に励みます。その塾で一緒に学んだ学友には、後に幕府の大老となる井伊直弼もいました。2人の縁は、数十年後、捕縛する者とされる者という運命へと進んでいくのでした。

episode 1

## 清貧に身を置き、学問を追究したい…

豪商の家に生まれた幽眠は、若い頃、自ら苦学の道を選び、実家を離れて質素な勉学生活を送っています。

儒学者の中川漁村に学ぶため近江に移った幽眠は、農家の倉庫を借りて暮らしました。

倉庫には西向きの窓が一つしかなく、しかも窓が高くて明るくないので、窓の下に畳を高く積んだ上に座って勉強したといいます。午後になって日が傾くと、たった一つあるすだれをかけて日光を遮りますが、強い日差しでたいへんな暑さでした。夜は蚊を除けるために旅行用の衣類入れの箱を並べた間に頭を入れて、その上に単衣の着物をかけて眠りました。

また、冬は離れたところにある便所まで雪を踏んで往復し、倉庫の中にはこたつもないといった厳しい状況のなかで苦学を続けたのでした。幽眠は、自分が父や兄の手助けをせずに、好きで勉強しているのだから、みだりに親のお金を使いたくないという強い意志を持っていたのです。その後、23歳の時には、学問をさらに極めようと京都に出て、詩人の梁川星巌や儒学者の森田節斎らと交わります。彼らは尊王攘夷派の※先鋒であった梁田雲浜（P116参照）の思想に傾倒し、若く血気盛んな幽眠もまた尊王攘夷思想の影響を大きく受けていきました。

ゆかりの地
（県内）坂井市
（県外）滋賀県彦根市・大津市
京都府京都市

episode 2

# 福井藩による国政改革の画策を助ける

天保7（1836）年、京都で私塾を開いた幽眠は、中国の書物の『孝経』に注釈を加えた本を出版し、それをきっかけに関白の鷹司政通と親しくなります。そして鷹司家お抱えの儒官に就任したことで、幽眠は福井藩と鷹司家を繋ぎ、福井藩が国政改革を画策する際に、その水先案内をすることになります。

慶永の命で上洛した橋本左内（景岳）P.130参照は、将軍継嗣問題、対米条約勅許問題解決のため、桃井伊織の変名で、宮中に隠然たる勢力をもつ関白鷹司政通（在職、文政三～安政三）に接近をはかった。（中略）

左内にとって、好都合であったのは、鷹司家に仕えていた三国大学（幽眠）が越前三国の出身であったこと、慶永の側近中根雪江P.92参照とは、旧知の間柄であったことである。左内は大学（幽眠）の熱心な紹介で、鷹司家諸大夫小林良典（民部権大輔）と相知り、鷹司政通を一橋派側に引き入れる入説工作を行った。（中略）

良典は関白九条尚忠が南紀派の入説工作で継嗣問題の先行き不安であると嘆いたので、関白に入説工作を行うには越前侯（慶永）より大学（幽眠）への継嗣について周旋を乞う旨の直書を申し受ける以外に道はないとの結論に達したわけである。慶永からの三月十八日付大学（幽眠）宛の直書は二十一日に届き、これを鷹司太閤（政通）に披露することになった。

ところで大学（幽眠）がこれを政通父子に披露したところ都合よく運び、父子とも周旋を引きうけ、それまで幕府派であった政通を一橋派に引き入れることに成功した。その背後には、大学（幽眠）の他に梅田雲浜P.112参照、梁川星巌ら在京の尊攘派の人達の説得や策動があったことも見逃せない。

《『三国幽眠　没後100年記念展』中の「三国幽眠先生の生涯」より》

こうした働きをした幽眠は、大老の井伊直弼による安政の大獄で追放刑となり、近江国石山（滋賀県大津市石山）で4年間の謹慎生活を送ります。

その後、明治維新を迎えると新政府の教部省に入り、また、『古事記』を研究して『略解古訓古事記』を出版するなど、国学の普及にも努めました。維新後にはこんなエピソードも残っています。

維新後の明治二年、鷹司輔熙が議定になると、幽眠はその御用掛である議事局扶に推挙され、兼ねて鷹司家の家政金穀総轄を命ぜられる。また、越前藩士三岡八郎（後の由利公正）P.126参照が紙幣発行の議を建白した時には、幽眠は岩倉具視公よりその利害得失を諮問され「今財政ノ急ヲ救ハンニハ之ヲ捨テテ他策ナシ、大利一時ノ小害ヲ顧ルニ暇アラズ」と賛同したという。

《和田義一著『略解古訓古事記』と三国幽眠より》

※教部省…明治初期、宗教統制による国民教化の目的で設置された中央官庁の組織。
※先鋒…先頭に立って指導（指揮）をする人。
※儒官…儒学を教える役目の職。

## check for 三国 幽眠


和田義一『略解古訓古事記』と三国幽眠
『みくにの歴史講座資料』みくに地区まちづくり協議会歴史・文化・にぎわい部会
『三国幽眠　没後 100 年記念展』三国町郷土資料館
三国一慤『笑草　三国幽眠伝』
三国幽眠『大慶喜心院略伝』教学部


**こぼれ話**

幽眠の父は、丁稚から一代で財を成し、福井藩を代表する豪商に成長した人物。そして、同じく三国の豪商の内田家とともに、財政のひっ迫した福井藩に、多額の御用金を何度も納め、藩の財政を支えていました。実は今も森家の資料の中にその借用書があり、それが残っているということは返済されなかったとみられます。

# 寺川庄兵衛

1811年～1856年

**農具の千歯扱きを改良し製造を開始。若狭千歯扱きは人気を博し美浜町早瀬の産業になり行商によって北海道から沖縄まで全国に普及。**

どんな子だった？

## 21歳頃から千歯扱きを作り始める

庄兵衛は、三方五湖の一つ久々子湖と若狭湾の間にある美浜村早瀬（三方郡美浜町早瀬）で生まれました。その人物像については全くわかっていませんが、『わかさ美浜町誌』の「早瀬での千歯扱きの製造業は、天保2（1831）年に寺川庄兵衛によって創始されたという」との記述から計算すると、21歳頃に千歯扱きを作り始めたことになります。

千歯扱きは米や麦の脱穀に使う道具です。平地のわずかな早瀬は米作りが盛んではないため、なぜ庄兵衛がその改良に着手したのかは想像するほかありませんが、少なくとも創意工夫の得意な少年であったようです。

episode 1

## 早瀬の千歯扱きの製造と販売

千歯扱きとは、櫛状に並んだ歯（刃）に稲穂の束を通してしごき、穂から籾を外す農具です。千歯扱きが初めて登場したのは、庄兵衛が生まれる100年以上前の元禄年間（1688～1704年）、和泉国（大阪府南西部）で考案されました。それまでは箸のような物の間に穂を挟み、籾をしごき取る方法が用いられていました。それに比べて作業効率の良い千歯扱きは広く普及し、その後、伯耆国（鳥取県中部・西部）でも製造されるようになります。また、敦賀郡（敦賀市）でも製造していたようです。

そして、さらに籾を落としやすい歯（刃）を研究し、効率の良いものに改良したのが庄兵衛でした。その製造や販売の始まりについて『わかさ美浜町誌』と『昔風と當世風』は次のように解説しています。

> 早瀬は耕地が少ない寒村であったため、寺川庄兵衛は伯耆国や大坂から千歯扱きを買い入れて販売することを始めたが、これらの製品が脆弱であることに気付いて研究を重ねた結果、改良に成功した。早瀬産千歯扱きの販路は、最初は三越（越前・越中・越後）、奥州、出羽方面に、明治維新後は北海道から沖縄にまで及んだとされる。
>
> 《美浜町発行『わかさ美浜町誌　美浜の文化 第六巻』より》

ゆかりの地　（県内）三方郡美浜町

早瀬は千歯扱の生産地として知られていた。天保五年（一八三四）に寺川庄兵衛が出雲や伯耆から取り寄せた鉄を原料にして、焼付の刃を用いた優れた性能をもつ千歯扱を開発したのである。最盛期には、鍛冶職人が二〇人程度いたといわれている。まず農家に製品を納め、後で別の人物が代金を回収する方法で、全国的に販売を展開した。しかし大正から昭和初期に普及した足踏式脱穀機の登場で、千歯扱の生産は急速に衰退した。

《古々路の会発行『昔風と當世風』第九十三号所収
《「民俗儀礼に残る早瀬の歴史」より》

千歯扱きが早瀬の産業として発展した背景には、性能の良さと合わせて、その土地柄も関係していました。もともと早瀬には海産物などの行商人が多く、また、北前船の寄港地であったことがその要因として挙げられます。刃の製造に用いる鉄は、山陰地方から北前船で早瀬に運ばれたと考えられ、また、でき上がった製品を日本海側の各地へ運ぶ際には、当然、北前船も利用されたでしょう。そして、海産物などの行商で商売に慣れていた早瀬の人々によって、早瀬の千歯扱きは広く普及し、伯耆国の倉吉と並ぶ産地へと成長していったのでした。早瀬産は「若狭千歯扱き」とも呼ばれ、性能が良い一つのブランドとして位置づけられていたようです。

episode 2

# 明治時代、日本各地を商いの舞台とした早瀬の行商

千歯扱きの製造は明治に入っても続きます。何軒もの工場が操業し、また、明治42（1909）年には、早瀬の人口1327人のうち約200人が行商人でした。

早瀬の行商人は身のまわりの品をつめた籠やかばんなどを持ち女は手甲※、脚絆※に、ひざまでの絣※の着物を着用し、わらじをはき、こうもり傘を持って出かけました。

当時、洋傘を持つことは、ハイカラで粋なことであり、行商人であることを示すものでした。

千歯扱きの販売は掛売がほとんどで、稲刈り前に販売し、収穫後に精算という形が多かったといいます。収穫後の方が、確実に集金できることが多かったのかもしれません。

また、地元には「行商人は安い宿ではなくて、それなりの旅館に泊まっていたらしい。売る相手に足下を見られないようにしていた」とも伝わっているようです。

福井県立若狭歴史博物館には、そうした行商の売上帳や、製造の道具、部品、完成品など、千歯扱きにまつわる品々が所蔵されています。一人の若者の工夫が産業になり、村の暮らしを支え、そして、日本中の米作りを助けた画期的な農具であったことを知ってそれらを見ると、その見方もまた違ったものになるのではないでしょうか。

※大坂…明治維新以前の大阪の名称。
※手甲…上腕から手首や手の甲を汚れや外傷などから守るために、覆った布製の装身具。
※脚絆…旅や労働の際に、防寒や保護などのため、ふくらはぎを覆った布製の装身具。
※絣…模様織りの一種。

check for 寺川 庄兵衛

森隆男「民俗儀礼に残る早瀬の歴史」『昔風と當世風九十三号』古々路の会
『わかさ美浜町誌　美浜の文化第6巻』美浜町
『千歯扱き　倉吉・若狭・横浜』横浜市歴史博物館
垣東敏博「若狭の千歯扱き製造業者・販売業者について」『福井県立若狭歴史民俗資料館館報　平成21年度』
福井県立若狭歴史民俗資料館（福井県立若狭歴史資料館）

こぼれ話

『わかさ美浜町誌』によると、早瀬に残る明治12年の史料に「稲扱　九千挺　但し五千挺　地方より買入れ輸出す」とあることから、商人たちは早瀬産のほかに他所産の千歯扱きを仕入れて販売したことがわかっています。

美浜町飯切山のふもとには、明治31（1898）年に建立された寺川庄兵衛の功績を讃える碑があります。

# 土井利忠（どいとしただ）

1811年～1868年

**江戸時代後期の大野藩主。大野屋の設置、藩船大野丸による輸送蘭学の奨励、洋式軍隊への転換など斬新な政策で藩政改革に成功。**

どんな子だった？

## 大名家の存続がかかった待望の男子誕生

利忠は、第5代藩主の土井利義の子として生まれました。父の利義は、利忠が誕生するまで男子に恵まれず、跡継ぎがない大名家は取り潰しとなるため、親戚から養子を迎え、大野藩士土井家6代目藩主土井利器として家督を継がせました。そして、自身は隠居しますが、翌年に待望の男子が誕生。それが利忠でした。

8歳の時、元服して利忠と改名した直後、第6代目藩主の利器が病気に倒れます。利器には跡継ぎがいなかったため、またもや藩存続の危機に。藩は急きょ利忠を利器の養子として幕府に届出し、その後、ほどなく利器は亡くなり、利忠が第7代目藩主となります。文政元（1818）年のことでした。

episode 1

## 倒産寸前の藩を立て直す決意「更始の令」

利忠は51歳で藩主を隠居するまで、様々な政策を打ち立て、大野藩の危機を救った名君として知られます。

19歳で江戸から大野に入った当初の藩は大赤字を抱えた状況にあり、利忠は、さっそく財政の立直しに取りかかります。大野で正月を初めて迎え、その月のうちに家中倹約令を出し、2月には町の人々にも倹約令を発布。贅沢品の禁止はもちろんのこと、細かく商品名をあげて、他所から仕入れた物の販売も禁じます。これは後に地場産業の発展に繋がるものでした。

しかし、倹約の結果が出るより先に、大変な天災に見舞われてしまいます。世に言う天保の大飢饉が天保3（1832）年から始まり、人々は飢え、疫病まで発生。死者の埋葬が追いつかず、大野の川に沢山の死体が流れていたというほど悲惨な状況でした。

天保13（1842）年、利忠は藩政の一大改革を決意。藩の困窮は藩主の責任とした上で、改革案に協力を求め、皆で新しくやり直そうという「更始の令」を発布。利忠は家臣を一同に集めて、それを家老の中村重助に読み上げさせました。

「自分はまず家族も含めて出来る限り暮しを切り詰めることにした。そして皆には、今までの借米も返さぬうちに心苦しいが、更に頼まなければならないと思う。その結果、暮しは一段と困窮することと思うが、互いに助け合って堪え忍び、政務に励む

ゆかりの地
（県内）大野市
（県外）東京都　北海道

写真提供：大野市博物館所蔵

よう頼み入るものである。（中略）施策の詳細については追って沙汰を下すが、重ねて申す。皆が真忠の力を尽してくれなければ、大野藩の存続は覚束ないのである。どうか我が意を汲み、なにぶんとも改革案に協力してくれるよう、あらためて頼み入る」

中村の声が終っても、顔を上げる者は一人もいなかった。藩主がこれほどへりくだったもの言いで家臣に頼みごとをするなど、前代未聞であった。誰もが忸怩※たる思いにとらわれ、書院は嗚咽の声で満ちた。　《大島昌宏著『内山良休 そろばん武士道』より》

「更始の令」は、封建社会にあっては珍しく、能力重視を取り入れていました。この後、利忠は参勤交代で江戸にいる時も、次々と大野藩に指示を伝える手紙を出し、人事の刷新をはじめ、藩政の大改革を進めていきました。

episode 2

# 攻めの姿勢で取り組んだ藩政改革

新しい人事では内山良休（P.94参照）と隆佐の兄弟を抜擢。兄の良休は財政の立直しに才能を発揮し、弟は軍事面で活躍しました。財政面では藩の借金の整理、地場産業の振興、藩直営の大野屋での商売などが成果を上げ、借金を短期間で処理することに成功。大野屋は、大坂での開業後、江戸、横浜、神戸、箱館、岐阜、名古屋、また、越前各地にも出店し、藩船の大野丸を使って藩内の産物を運んで各地の店で売り、そこの産物を買い付けて他国に売るという、まさに現代の商社の先駆けでした。こうした改革の全体像について、図説福井県史はこう解説しています。

幕末のころには、日本全国ほとんどの藩が赤字財政に苦しみ、社会は行き詰まって、人びとは途方にくれていました。

ところが大野藩は、百姓や町人に特産物を作るようすすめ、大野屋という藩営の取次店を全国各地に設けてこれを販売し、利益をあげていました。また、幕府の許可を得て蝦夷地南部、現在の北海道渡島半島の内陸部を調査し、さらに北蝦夷（ロシア領サハリン）まで渡って「開拓」や交易をこころみました。大野屋の商品運送や蝦夷地への往来のために大野丸という西洋式の帆船も買い入れています。

きっかけとなったのは、一八四二年（天保十三）四月二七日、藩主土井利忠が出した「更始ノ令」でした。町人や百姓に御用金を命じて財政を補うとともに、藩内のゆるんだ空気を引き締め、また、人材を育て、能力ある人を登用して藩の再建に努めるというもので、思い切った藩政改革をうながす内容です。

藩内の空気は変わりました。翌年、藩校明倫館が設けられると、進んでオランダの医学など、外国の学問や技術を学び始めます。五十三年（嘉永六）には藩の軍制を西洋式に変えました。

《『図説福井県史』近世「大野藩と大野丸」より》

見事に大改革を為し遂げた利忠は、文久2（1862）年に隠居し、その6年後に58歳で亡くなりました。大野城の麓には、その遺徳を偲び、利忠を祭る柳廼社が建立されています。

※忸怩たる思い…自ら恥じ入る気持に駆られること。

## check for 土井 利忠


『大野の宝　先人に学ぶ　土井利忠』大野市小学校道徳分科会
『山と海の殖産興業』大野市歴史博物館
『大野市史』大野市
『土井利忠公とその家臣たち』大野市
『土井利忠公と大野藩』土井利忠公百年祭奉賛会
大島昌宏『内山良休　そろばん武士道』学陽書房
『福井県史』通史編４近世二　福井県
『図説福井県史』福井県
『これき人物シリーズ３　ふくいの先人たち　幕末』福井県立こども歴史文化館


こぼれ話

利忠は人材の育成を重んじ、学問の振興に力を注いだ藩主でもありました。藩校の明倫館や洋学館を設立し、とくに洋学館では、大坂の適塾塾頭を務めた伊藤慎蔵を招き、また、高価な洋書を買い入れて教育の充実を図ります。こうした大野藩の洋学館には全国から生徒が集まりました。

# 橘曙覧（たちばな（の）あけみ）

1812年～1868年

**幕末の福井を代表する歌人、国学者。清貧の歌人ともいわれ、「たのしみは」ではじまる「独楽吟（どくらくぎん）」はビル・クリントン大統領のスピーチでも有名に。**

どんな子だった？

## 母に次いで父も亡くし、祖父母に育てられた少年時代

橘曙覧は本名を正玄尚事（しょうげんなおこと）、幼名を五三郎といいました。正玄家は、奈良時代の皇族橘諸兄（たちばなのもろえ）の血筋という誇り高い名家で、曙覧の生家はその分家にあたり、福井城下の石場町（福井市つくも）で文具商を営む裕福な家庭でした。

しかし、2歳の時、母が亡くなると、曙覧は府中（ふちゅう）（越前市）にある母の実家、酢屋を営む山本家に預けられます。祖父母や叔父に可愛がられ、経済的にも恵まれた環境で育ちますが、15歳の時に父とも死別。曙覧はその後、仏門（※ぶつもん）に入ることを考えるようになり、祖父と親しかった妙泰寺（みょうたいじ）（南越前町西大道）の住職から仏典を学び始めます。

episode 1

## 国学と和歌に打ち込み、貧しい暮らしの中に見つける楽しみ

幼くして母を亡くし、また、父までも亡くした曙覧は、妙泰寺の住職から仏典を学ぶうちに、漢文や詩歌に優れた住職の影響を受け、興味は学問へと傾きます。しかし、ほどなく実家の家業を継ぐことになり、曙覧は福井城下の正玄家へ戻りますが、学問への思いが断ち切れず、商売に身が入りません。結婚をしても変わることなく、親戚にいくら諭されても、書を読みあさる日々でした。

そしてついに、28歳（25歳、35歳とも）の時、商売も財産もすべて異母弟に譲り、家を出てしまいます。曙覧は足羽山に「黄金舎（こがねのや）」を開き、移り住みます。そこでは、貧しいながらも学問や和歌に打ち込むことができ、また、それまでに2人の娘を生後間もなくで亡くしていた曙覧夫婦に三女が誕生し、ささやかな幸せが訪れました。

ところが、三女が3歳の時、天然痘（てんねんとう）に罹り、曙覧の学問仲間で医師の笠原白翁（かさはらはくおう）P100参照が駆けつけますが、幼い命は天然痘に奪われてしまいます。白翁は天然痘の撲滅（ぼくめつ）に大きな足跡を残した医師ですが、越前に天然痘予防の種痘（しゅとう）をもたらしたのは、もっと先のことでした。この頃、曙覧はその悲しみから逃れるように、本居宣長（もとおりのりなが）の弟子、田中大秀（たなかおおひで）を飛騨高山に訪ねて、ほぼ1ヶ月間、国学を学んでいます。

嘉永元（1848）年、37歳の時、曙覧は住まいを三橋（福井市照手2丁目）に移し、藁屋（わらや）と称しました。相変わらず貧し

ゆかりの地
（県内）福井市　越前市　勝山市
（県外）岐阜県高山市

写真提供：福井市立郷土歴史博物館所蔵

い暮らしでしたが、息子が3人生まれ、充実した日々の中で、心のままに感じたことを歌に詠みます。「独楽吟」には、極貧の中に、安らぎと楽しみを見いだす歌が収められています。

その「たのしみは」から始まる曙覧の歌は、当時の人々にも共感と感銘をもたらしました。そうした中、曙覧のことを藩主の松平春嶽が知り、春嶽は次第に曙覧の生き方や歌に惹かれていきます。P124参照 春嶽は、曙覧が煙草を好きなことを知ると、自作の歌を添えて煙草を贈っています。藩主が庶民にそのようなことをするのは、破格のことでした。

曙覧が54歳の時、春嶽は藁屋を訪ね、互いに歌を詠み合い、語らいの時を持ちます。春嶽はその感動を『橘曙覧の家にいたる詞』として書き残しています。また、曙覧に国学や歌の教授になってもらいたいと登城を求めたこともありました。しかし、曙覧は、歌で丁寧に断りの返答をしました。

花めきてしばし見ゆるもすずな園廬（たぶせのいほ）に咲けばなりけり

この歌に答えて、春嶽は断念することを歌で返しています。

すずな園田ぶせの庵にさく花をしひてはをらじさもあらばあれ

春嶽は曙覧を尊敬し、藁屋に「志濃夫廼舎」という名を与えました。さらに、春嶽の跡を継いだ藩主の茂昭は、慶応3（1867）年、曙覧に扶持米10俵を与えるよう取り計らいます。しかし、その翌年8月28日、曙覧は、57歳でこの世を去ります。

episode 2

## 現代に再び光があたった「独楽吟」

明治時代、息子の井手今滋が曙覧の生前の草稿をまとめた歌集『志濃夫廼舎歌集』全6集を出版。「独楽吟」の52首もこの中に収められています。後に、俳人であり歌人でもある正岡子規がこれを読み、〝源実朝以来、歌人の名に値するものは橘曙覧ただ一人〟と高く評価しています。

万葉を学んで万葉を脱しており、日常の細かなことをとらえて、縦横に思いを走らせているところは、かえって気高く優雅で、少しの俗っぽさもない。

《正岡子規　新聞『日本』の記事より意訳》

平成6（1994）年、今上天皇（今の天皇）と皇后両陛下がアメリカを訪問した際、ビル・クリントン大統領が歓迎挨拶の中で、「独楽吟」の「たのしみは」で始まる一首を引用してスピーチしたことで再び脚光を浴び、橘曙覧の名は一躍有名になりました。

たのしみは　朝おきいでて　昨日まで
無かりし花の　咲ける見る時

《橘曙覧「独楽吟」より》

※仏門に入る…仏教を学び、僧になること

### check for 橘 曙覧


新井満編『楽しみは　橘曙覧・独楽吟の世界』講談社
『橘曙覧入門』福井市橘曙覧記念文学館
足立尚計『松平春嶽と橘曙覧』［抜刷］
河合清仙『橘曙覧の人物像迫る曙覧の参宮記』
上坂紀夫『橘曙覧　清貧の歌人』フェニックス出版
上坂紀夫『自由自在』ひしだい書店
鈴木善勝『「橘曙覧の世界」に生きる』日本文学館
『本居宣長、田中大秀　そして曙覧へ』福井市橘曙覧記念文学館
神一行『「たのしみ」な生き方　歌人・橘曙覧の生活法』角川書店
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第Ⅰ集　青少年育成福井県民会議
『これき人物シリーズ3　ふくいの先人たち　幕末』福井県立こども歴史文化館


**こぼれ話**

曙覧の国学の師である田中大秀は、継体天皇の系譜を明らかにした「玉穂宮考」を著し、継体天皇が世に知られていないことを残念に思い、曙覧に碑の建立を依頼します。曙覧は自身が貧しいながらも、学友らと資金繰りに奔走し、足羽山に碑を建立しました（福井市足羽1丁目8足羽神社境内）。

# 酒井忠義

1813年～1873年

**小浜藩の第12・14代藩主。江戸幕府を守ろうとする佐幕派として井伊直弼のもと安政の大獄を指揮。公武合体に尽力。**

どんな子だった？

## 徳川幕府の大老を勤めた家柄を背負って

若狭国小浜藩は、寛永11（1634）年に藩主となった酒井忠勝P64参照以来、230年余りにわたって酒井家が藩主を務め、その最後の藩主となったのが忠義でした。

忠義は、第10代藩主の六男として、京都で生まれました。文政11（1828）年、幼名の悠之丞から与七郎に改名。その後、義兄にあたる第11代藩主の養子となり、天保5（1834）年に酒井家の家督を継いで第12代藩主に就任。一度、引退した後、再び藩主となり、第14代藩主として明治の版籍奉還を迎えました。

酒井家は、初代の忠勝が幕府の大老を務めた家柄であり、忠義もまた幕府に強い忠誠心を示す佐幕派として働きます。

episode 1

## 過酷な運命の糸に結ばれた梅田雲浜と忠義

幕末の小浜藩主であった忠義は、京都を警護する京都所司代として安政の大獄を直接指揮し、公武合体に奔走した佐幕派（江戸幕府の存続を支持する側）の人物として知られます。

安政の大獄の前にも京都所司代に任命されたことがあり、その時に小浜藩士の梅田雲浜P12参照を藩から追放しています。雲浜は幕府の政治が時代に合わないと考え、海防の強化を忠義に建言※。先祖代々にわたり徳川幕府の忠臣である小浜藩に、幕政批判を口にする者がいることは、許されないことでした。雲浜の才能を高く評価していた忠義にとって、その追放は辛い決断であることは言うまでもなく、さらにその後、この2人にはもっと辛い宿命が待ち受けていました。

安政5（1858）年、忠義は二度目の京都所司代に就任。この時から鯖江（鯖江市）藩主の間部詮勝P90参照とともに、井伊直弼の命令のもと、幕政に反対する尊王攘夷派の捕縛を指揮することになります。弾圧事件として有名な安政の大獄の始まりです。それは、捕縛する側にも捕縛される側にも、過酷な運命でした。海音寺潮五郎が西郷隆盛の生涯を描いた小説には、井伊直弼の腹心※の部下であった長野主膳と忠義とのやりとりの中で、揺れ動く忠義の心情をのぞかせています。

酒井忠義は井伊によって新しく所司代となり、八月十六日に江戸を立って上京の途についた。長野はこれを桑名まで出迎え

ゆかりの地
（県内）小浜市
（県外）東京都　京都府京都市

て、京都の情勢を説明し、浪人学者らの説が堂上衆の議論をいやが上にも反幕的に駆り立てていることを説き、

「この悪儒者共の中で、最も兇悪なのは梅田源次郎であります。この男は先般の密勅降下にもずいぶん働いた証拠があるばかりでなく、その後、関白殿下の辞職願や両伝奏の辞職願にも関係があります。（中略）」

と言った。

旧君臣の情がある忠義は弱った。一体忠義は雲浜に好感をもっている。雲浜の方も旧主として忠義に好意を抱いている。忠義が井伊によって所司代に新任されたと聞きこむと、酒井家の重臣に書を飛ばして、井伊に合体されることはこの際危険である。お考え直しをいただきたいと忠告したほどである。

こういう仲だから、長野の言うことを言を左右にして受けつけなかった。※

《海音寺潮五郎著『西郷隆盛 天命の巻』より》

忠義は、長野に対してはっきりとした返答を避けたのでした。しかし、ついに長野に説き伏されて、就任直後の9月7日、雲浜を捕縛。忠義が安政の大獄で最初に捕縛したのが雲浜でした。その後、雲浜は江戸に送られ、獄中で病死。また、安政の大獄で弾圧された福井県ゆかりの人物では、福井藩士の橋本左内（P.98参照）が処刑、三国大学（P.102参照）が追放刑、福井藩主の松平春嶽（P.124参照）は謹慎に処せられています

episode 2

## 忠義の暗殺計画と寺田屋騒動

安政7（1860）年3月3日、桜田門において直弼が殺害される事件が起こります。この桜田門外の変によって弾圧は収束。幕府は、かねてから検討していた公武合体を急ぎ、その京都での任務を忠義に命じました。公武合体は、孝明天皇の妹和宮と将軍の結婚によって権威の修復を図るというもので、文久2（1862）年2月、婚儀が執り行われて政略が成功。忠義はその功績を認められます。しかし、この時、密かに薩摩（鹿児島県）藩の志士は、関白の九条尚忠と忠義の暗殺を企てていました。そして、同年5月、その計画を知った島津久光の家臣が首謀者たちを京都伏見（京都市伏見区）の寺田屋で殺害。世に言う寺田屋騒動※です。これによって忠義は暗殺の危機を脱しますが、皮肉なことに、この事件がもとで京都所司代を解任され、隠居を命じられます。

この時、ちょうど鳥羽（京都市南区）で起きた火災と重なったこともあって、京都所司代内は混乱します。忠義は志士たちが蜂起したと勘違いして二条城の防備を固め、町の人々を危険にさらさないように立ち退きを命じます。しかし、これがまったくの誤認だったため、責任をとることになったのでした。

その後、忠義に替わって藩主となった忠氏の病気によって、明治元（1868）年、再び藩主に就任し、翌年の版籍奉還から1年間、小浜藩知事を務めました。

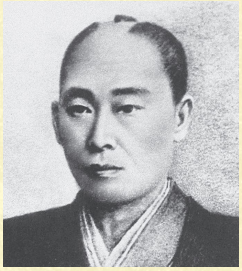
※建言…上役などに対して意見を述べること。
※腹心の部下…最も信頼されている部下。
※言を左右にする…はっきりとしたことを言わずに、その場をごまかすこと。
※寺田屋騒動…文久2年（1862）年、薩摩藩の尊攘派志士に対する島津久光の弾圧事件。

### check for 酒井 忠義


海音寺潮五郎『西郷隆盛　天命の巻』学研
中島辰男『若狭路往還』洛西書院
有吉佐和子『和宮様御留』講談社
『福井県史』通史編4近世二・通史編5近現代一　福井県
『図説福井県史』福井県
『小浜市史』通史編上巻　小浜市


こぼれ話　ペリー来航の1ヶ月後、老中の阿部正弘が諸大名へ意見を述べるよう諮問した際、忠義は、虚偽をいわず誠実に答えるべきこと、交易を許すならオランダ人に取り扱わせること、備えを固くして日本の名折れにならないように対処すべきという非常に建設的な意見を述べています。

# 梅田雲浜



1815年～1859年

**小浜出身、幕末を代表する儒学者。横井小楠、吉田松陰らとも親交を持ち尊王攘夷の主導者として安政の大獄で捕縛され獄死。**

どんな子だった？

## 順造館で学問にのめり込んでいった少年時代

梅田雲浜は、小浜城下（小浜市）の竹原三番町（千種2丁目）に住む小浜藩士の次男に生まれ、幼い頃は源次郎と呼ばれていました。「雲浜」は今でいうペンネームで、「梅田」は、後に祖父方の梅田家を継いだことによります。

8歳の時、雲浜は藩校の順造館（県立若狭高校）に入り、崎門学に出会います。崎門学は儒学から生まれたもので、小浜藩の藩校で教える儒学は、崎門学が中心でした。15歳になると、もっと学問をしたいという思いに駆られ、京都に出て崎門学派の塾、望楠軒に入り、さらに1年後には江戸に遊学。以降10年間、雲浜は江戸で崎門学の神髄を究めていきます。

episode 1

## 貧しい暮らしを続けながら崎門学に没頭する日々

江戸に出た雲浜は、小浜藩邸に出仕していた叔父の家に寄宿しながら、藩の崎門学者であった山口菅山の門下に入ります。崎門学は朱子学の一派にあたり、後に尊皇攘夷運動の思想的な原動力となった学問です。そして、それを若い志士たちに広め、支持されたのが雲浜でした。

天保11（1840）年、雲浜は小浜へ戻り、祖父の家系を継いで梅田の姓を名乗るようになります。翌年、雲浜の父が藩の命令で熊本に行く際に、高齢の父の供として随行。熊本藩に滞在中には、横井小楠（P.98参照）と会い、大いに意気投合したといいます。

その後、大津で湖南塾という私塾を開いた後、京都へ出て、少年時代に学んだ崎門学の本拠、望楠軒に再び入り、若くして望楠軒の講主に就任しました。

雲浜の学問を教えるねらいは、常に世の中を治め、人民の難儀を救うことでした。だからその教え方は、ただ書物の字句にとらわれるのではなく、天下の時局を論じ、実際の生活の問題を取り上げて悲憤慷慨（※）するといったものでした。その明快な調子の熱弁と真剣な態度には、だれひとりとして感動しないものはなかったということです。そしてまた雲浜は、実践のともなわない学問をきらい、「剣の道は習っても、みだりにこれをつかってはならないが、学問は、学んだら必ずこれを実際に行わなければ意味がない」と教えました。

ゆかりの地
（県内）小浜市
（県外）滋賀県　京都府　山口県　熊本県
茨城県　東京都　奈良県

写真提供：国立国会図書館所蔵

《青山晴男著『若越をひらいた人たち 物語きょうど史』より》

この頃、福井藩士の三寺三作が藩校の講師を探すため、京都の雲浜を訪ねています。雲浜は三寺に小楠を推薦し、これが後に大きな影響を福井藩に与えた小楠を福井に招くきっかけとなりました。また、福井藩の橋本左内P.100参照に小楠を紹介したのも雲浜でした。

episode 2

## 尊王攘夷の主導者として奔走、安政の大獄で獄死

嘉永5（1852）年、雲浜は小浜藩主の酒井忠義P.110参照に対して、外国の侵攻を防ぐ海防にもっと力を入れるべきと建言し、それが幕府への批判と受け取られて、藩を追放されてしまいます。

浪人となった雲浜は、外国船が次々に訪れて世の中に不安が広まる中で、日本の将来を真剣に考える者たちに、天皇を政治の中心とする尊王と、外国を追い払うという攘夷を結びつけた尊王攘夷の考え方を広めていきます。嘉永6（1853）年にペリーが来航した際には、攘夷運動を訴える志士たちの先鋒となって、幕政を激しく批判。江戸で吉田松陰と対策を論じ、また、同じ年にロシア艦隊が大阪湾に侵入した際には、武力で打ち払おうと計画した志士たちが、雲浜に頭となるよう求めます。しかし、大阪湾に着いた時にはロシア艦は退去し、計画は実行されませんでしたが、その後も雲浜は各地を奔走して思想を広め、長州の松下村塾にも立ち寄り、吉田松陰や久坂玄瑞らと交流し、長州の物産交易の仲介をして、活動資金をつくっています。また、その時に、松下村塾の額を雲浜が書いたとされます。

日米通商条約の調印反対や一橋慶喜の擁立など、雲浜を中心とした尊王攘夷の運動は、幕府にとって邪魔者に他なりません。大老を務める井伊直弼は雲浜を「悪謀の四天王」の一人として捕縛命令を出します。世にいう安政の大獄の始まりです。雲浜は最初の逮捕者となり、しかも皮肉なことに逮捕したのは小浜藩主の酒井忠義でした。江戸に送られた雲浜は激しい拷問を受ながらも、一貫して尊王攘夷を訴え続け、捕縛から1年後、獄中で病死によって45年の生涯を閉じました。

獄中での雲浜の強い信念がうかがわれる話を『梅田雲浜の人物像』から紹介しましょう。

安政五年九月、雲浜は捕われて獄中にあった。橋本左内、頼三樹三郎、山田勘解由など雲浜の親しい同志が多く、七十余人に上った。

雲浜がもっとも心配したのは、その多くの逸材を失うことであった。たまたま牢内で出会った山田勘解由に対して、雲浜は、番人に分からぬよう難解な漢語を用いてこう伝えたといわれる。「何もいうな。わしは当然命はないものと覚悟している。しかし、わしの首が落ちさえすれば世は朝廷のものになる。君らはまだ若いから、どんな呵責を受けても、あほうになって免れよ。ふたたびことを挙げることが肝要」と。

《村上利夫著『梅田雲浜の人物像』より》

※悲憤慷慨…世の中の不正などを悲しみ、憤りを感じて嘆くこと。

### check for 梅田 雲浜


村上利夫『梅田雲浜の人物像』友月書房
梅田昌彦『梅田雲浜入門』ウィング出版
『明治維新のとびらを開いた梅田雲浜の実像に迫る』小浜市郷土研究会
岡村昌二郎『流星　梅田雲浜の生涯』若狭文化叢書刊行会
童門冬二『幕末に散った男たちの行動学』PHP 研究所
中島辰男『若狭路往還』洛西書院
『梅田雲浜先生小伝』小浜市
青山晴男『若越をひらいた人たち　物語きょうど史』東洋書院
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第２集　青少年育成福井県民会議
『これき人物シリーズ３　ふくいの先人たち　幕末』福井県立こども歴史文化館

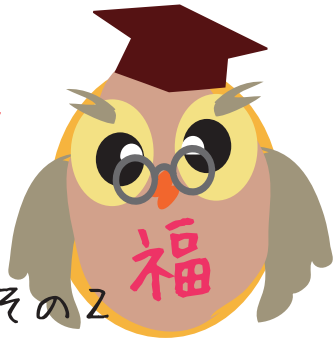

**こぼれ話**

雲浜の生活は非常に貧しく、妻の信がこんな歌を詠んでいます。「樵りおきし軒のつま木も焚きはてて 拾う木の葉のつもる間ぞなき」（歌意）薪は焚き尽し、燃料に不向きな木の葉を使わざるを得ないが、それすら満足に手に入らない。

信は、貧しいながらも夫を支え、励ましたというエピソードも伝えられています。

いっしょに考えよう

# 福ろう博士の先人の力ってなんだろう講座 その2




「どの時代でも[スゴイ]ことを成し遂げた人々には、その行動の根っこの部分に、いくつかの共通点があると思うのじゃが、諸君はどう思うかね。たとえばその一つに[人道]というキーワードが吾輩には浮かんでくる。難しい言葉じゃが、人として守るべき道のことであり、人間愛や慈悲といったものも内に秘めておる言葉じゃ。人は他人のために自分の利益にならないこともできる。それが人間ならではの知性と感情がなし得る行動と言われておる。では、そんな話を一つ紹介するとしよう。」

～誰の心にもある先人と同じ心～

## 人を大切に思う心にまつわる話

「戦前の小学校には修身という教科があった。戦時色が濃くなると軍国主義による精神教育の傾向もあったが、一言でいえば道徳のようなものじゃな。その中に綱女（つなじょ）という話があった。綱女とは遠敷郡小松原（小浜市小松原）生まれの綱（つな）という少女のことじゃ。その勇敢な行動は全国で有名になり、戦前生まれの人なら誰もが知る話じゃった。」

## 奉公先の赤ん坊を命をかけて守った少女、綱

時は江戸時代中頃の宝暦5（1755）年、綱は小松原村（小浜市小松原）の漁師、角左ヱ門の娘として生まれました。家が貧しかったため、綱は13歳で西津（小浜市北塩屋付近）の松見茂大夫家へ奉公に行き、1歳になる長男義方の子守りとして働いていました。

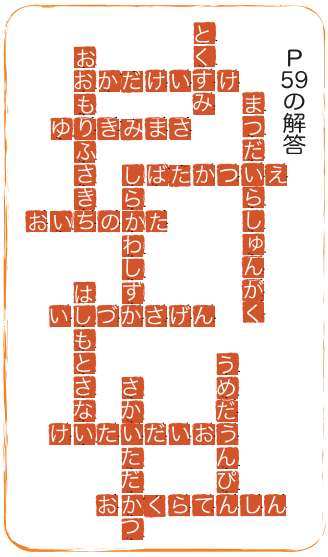
綱が14歳のある日のこと、いつものように義方を背負ってあやしていると、大きな犬が狂ったように綱をめがけて走ってきました。低いうなり声を出しながら、歯を剥き出して犬が綱に襲いかかろうとした瞬間、綱は恐怖の中でとっさに赤ん坊を前に抱きとり、自分の体の下になるよう覆い被さりました。そして、自分は何か所も噛まれ、恐怖と激しい痛みに耐えながら、赤ん坊をかばい続けたのでした。

近所の人が駆けつけて犬を退治した時には、綱の体は十数か所も噛まれ、傷だらけになっていました。綱は奉公先の松見家に運ばれて、医者に診てもらいましたが、鋭い歯で噛まれた傷は深く、また、病原菌が全身にまわり、手厚い看病の甲斐もなく、ついに20日（一説には10日）ほど後に息を引き取ったのでした。生死の境をさまよう中で綱は赤ん坊の安否を尋ね、無事であることを聞いて喜んだといいます。

自分を犠牲にしても奉公先の赤ん坊を守り抜いた綱。その話は町じゅうに知れ渡り、小浜藩主の耳にまで届きました。綱の行動に心を打たれた藩主は、墓碑を作らせて功績を讃えました。墓碑には「忠烈綱女」という藩の儒学者による碑文が刻まれています。現在、墓碑は西津地区の大湊にあり、西津小学校の児童らによってきれいに清掃されています。その後、綱女の像も作られ、現在、西津小学校校庭に置かれています。また、地元の有志による綱女顕彰会が、毎年7月の第一日曜日に顕彰祭を開催し、綱の話を後世に伝える活動を行っています。

忠烈…極めて忠誠心が厚いこと。

P59の解答



ちょっとコーヒーブレイクじゃ

並んでいる写真は
この本に登場しておる
先人ゆかりのものじゃ。
誰にゆかりのものか
わかるかな？

# 福井県の先人ゆかりの写真あてクイズ

正解は P237

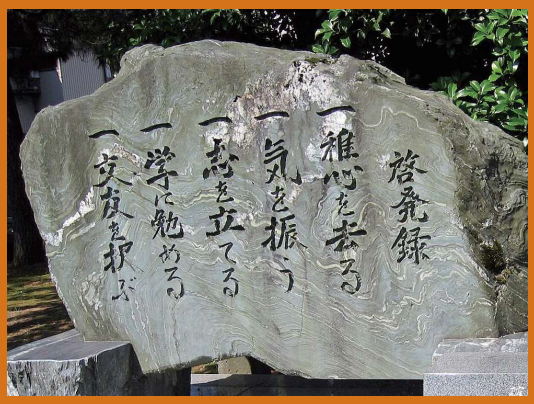
県立若狭歴史博物館所蔵

ヒント 美浜町早瀬の特産品「千歯扱き」

ヒント かつては銀行、今は敦賀市立博物館

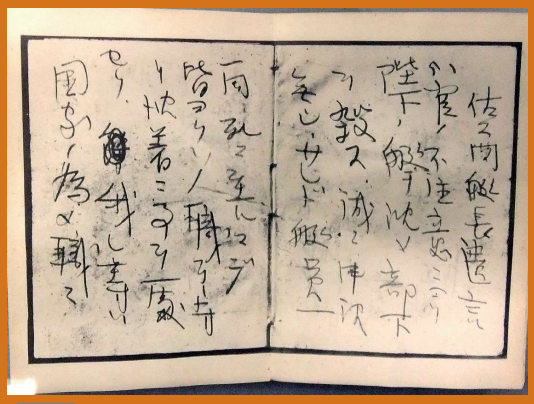
ヒント みくに龍翔館は小学校を復元した建物

ヒント 姉川の合戦で奮戦した武将の大太刀




ヒント 福井市内にある「啓発録」の碑

ヒント 天空の城として有名になった大野城



ヒント 沈んだ潜水艇の中で手帳に書いた遺書

# 長谷部怨連（甚平）

1818年～1873年

**幕末の福井藩士。藩政改革を実現したが挙藩上洛を画策し失脚。後に笠松県権知事。岐阜県令に就任。**

どんな子だった？

## 若い頃から有能で周囲に認められる

怨連は福井藩士の三男として、越前国足羽郡（福井市）で生まれ、後に長谷部家の養子となり、長谷部姓を名乗ります。通称は吉之助、後に甚平と名乗り、幕末の文書などでは甚平の名の方がよく使われています。

子どもの頃のことはよくわかっていませんが、若い頃からたいへん有能な人物として周囲に認められていたようです。それをうかがわせる話として、藩主松平春嶽（P124参照）の側近が、29歳の怨連を郡奉行という重職に推薦し、その4年後には財政を総括する勘定奉行に就任しています。また、幕末の志士としてよく知られる坂本龍馬も、怨連のことを越前の優れた人物の一人として見ていました。

episode 1

## 坂本龍馬に天下の人物と称賛された男

坂本龍馬が土佐（高知県）の兄や親類に送った手紙の中に、龍馬が認める人物の名を記したものがあります。その越前のところには、福井藩士の三岡八郎（P126参照）（後の由利公正）と怨連の二人が名を連ねています。龍馬は怨連を「長谷部勘右衛門」と記していますが、これは怨連の通称であった「甚平」を間違えて記憶していたためと考えられます。

一、当時天下之人物と云ハ、
　徳川家ニハ大久保一翁、勝安房守。
　越前にて八三岡八郎、長谷部勘右衛門。
　肥後ニ　横井平四郎。
　薩にて　小松　帯刀。
　　西郷吉之助。
　長州にて　桂　小五郎。
　　高松（太）（晋）普作。

右の引用中にある横井小楠（P98参照）は、安政5（1858）年から6年間、藩主の春嶽を補佐し、政治顧問を勤めた熊本藩士。怨連は小楠に学んでその思想に傾倒し、三岡八郎とともに富国策を推進。産物会所を設立するなど、藩政改革に大きな功績を残しました。

小楠と怨連について、二人が互いに才能を高く評価していた

ゆかりの地
（県内）福井市
（県外）岐阜県

ことがわかる二通の手紙が残っています。一通は恕連が橋本左内（P30参照）に宛てたもの、もう一通は小楠が熊本藩士に宛てたものです。

横（＝横井小楠　筆者注）先生始て対面、聞しに勝る大物、其議論たるや公明正大、頻に天地経綸之道理を主張有之、不和則不能存国、或は貿易之利害分明釈然、

（長谷部の横井小楠評、安政5年4月12日付　橋本左内宛書簡）

長谷部甚平抔彼国第一之人才にて、才力敏鋭、論断圧人、中々六ヶ敷男に御座候処一度も論談に及不申、

（安政6年　横井小楠の長谷部評、元田永孚に対して）

《福井県地域史研究会編『福井県地域史研究　第13号』本川幹男執筆より》

episode 2

## 挙藩上洛計画で失脚後、現在の岐阜県の初代知事に

文久3（1863）年5月頃から7月にかけて、福井藩はたいへんな混乱に陥ります。小楠の思想の影響を受けた恕連たち藩士が、日本が抱える外交と幕政改革のために藩を挙げて上洛しようという「挙藩上洛」を立案。この計画が藩論を二分する争議となったのです。一度は実行が決定しますが、結局、まだその時期ではないという結論に達し、計画は中止となり、首謀者たちは失脚。恕連は、慶応2（1866）年6月まで蟄居に処せられました。

しかし、蟄居が解けた2年後の慶応4（1868）年、再び政治の世界へ戻ることになります。笠松県（岐阜県）の権知事となり、笠松県が統合されると初代の岐阜県令に就任しました。笠松県時代には、就任して間もなくから水害対策に乗り出しています。岐阜県は木曽三川と呼ばれる木曽川や長良川、揖斐川がよく氾濫し、地域の人々は水害に悩まされ続けていました。

明治改元後の十一月、長谷部は治水対策を「水利論」にまとめ、木曽三川分流の必要性などを政府に訴えた。さらに翌年八月には、木曽三川下流部の治水工事は、政府主導で取り組むべきであると再度建言した。

政府がこれらの意見を認めたため、長谷部は名古屋・大垣・加納・高須四藩による治水担当者会議を開催した。この会議の詳細と結果は不明だが、一八六九（明治二）年から三年間にわたって、笠松県に十万五千円の治水費が計上されている。

戊辰戦争の最中にこの予算が実際に執行されたかは疑わしいが、このことは地域の実情を的確にとらえ、その対策を積極的に講じようとした長谷部の政治姿勢と、その手腕を示すものである。

《濃飛の歴史を語る会著『濃飛歴史人物伝』より》

恕連は、かつて挙藩上洛を計画した時の情熱そのままに、強い正義感と行動力で手腕を発揮。警察や小学校の設置、遊郭の廃止ほか、県政の基礎づくりに力を注ぎます。

しかし、明治6（1873）年、在任中の仕事半ばにして、56歳でその生涯を閉じました。後任には、幕末にともに活躍した福井藩士の村田氏寿（P20参照）が就任し、仕事を引き継いでいます。

※上洛…都（京都）へ行くこと。
※権知事…県令ともに県の行政機関の長。知事と同じ職務権限を持つ。

### check for 長谷部 恕連


長谷部楽爾『随筆集　道は瓦甓に在り』中央公論美術出版
濃飛の歴史を語る会『濃飛歴史人物伝』岐阜新聞社
後藤勝『岐阜県令長谷部恕連碑について』［抜刷］岐阜県文化財保護協会
『福井県史』通史編４近世二　福井県


こぼれ話

江戸からの帰国途中に箱根周辺で黒船の来航を知った恕連は、急いで引き返してペリーらの上陸を偵察。慶永に報告しています。そこにも恕連の俊敏な判断力と行動力が見えます。

また、安政の大獄で処刑された橋本左内の遺骸は、春嶽の命を受けた恕連が小塚原の回向院に葬っています。

# 松井耕雪

1819年～1885年

**府中（越前市）で越前打ち刃物の卸商を営む豪商松井家の9代目。莫大な富を藩校づくりに投入。福井物産総会所の総代としても活躍。**

どんな子だった？

## 鎌などの卸商として名を馳せた豪商の9代目

耕雪は、文政2（1819）年、越前国府中大黒町（越前市元町）の生まれで、通称を六右衛門といいました。

その頃、江戸では化政文化とも呼ばれる町人文化が花開き、地方の越前国でも大きな富を持つ商人が、経済だけでなく文化面でも盛んに活躍していました。耕雪の生家もそうした越前の豪商の一つに数えられ、府中特産の越前打ち刃物の卸商として富を築いていました。

耕雪は、高い教養と詩や画の才能を持ち、また、若くして松井家9代目の家督を相続し、後に相続した財産を投じて府中に藩校を設けるための資金を寄付したり、産業を育成したりと、教育や経済の発展に大きな足跡を残しました。

episode 1

## まちのために私財を設立

江戸時代後期になると、越前や若狭の各藩に藩校が次々と開設され、藩士の子弟教育の中心となっていく中で、府中（越前市）には、藩校がありませんでした。府中の豪商であり儒学者でもあった耕雪は、藩校の必要性を強く感じ、安政3（1856）年、その建設を藩に出願します。

そして、莫大な建設資金を寄付し、松原通りの南（天王町・武生公会堂記念館の南側）に校舎を建設。また、松井家が所蔵していた貴重な書物を寄贈したほか、教育方針や規則、履修教科、教員組織などの立案も耕雪が行ったとされます。

完成した藩校は「立教館」と名付けられ、同校は、後に東京府知事や帝国大学（東京大学）初代総長となった渡辺洪基P144参照をはじめとして、優れた人材を世に送り出しています。後に「立教館」は、福井藩主松平春嶽P124参照から「進脩書院」の書を贈られたことに由来する名「進脩黌」と改名。また、明治5（1872）年の学制公布により、小学校の「進脩小学校」に引き継がれました。

耕雪の伝記『松井耕雪翁伝』中の「翁についての追懐談」は、耕雪について次のように述べています。

> 松井耕雪翁は如何なる人だ。此人は藩の武士ではないが、帯刀御免の町人である。武生の物産の第一なる鎌・出刃庖丁・菜切庖丁類の問屋の主人であつた。若くして親を失ひ家督相續をし

ゆかりの地　（県内）越前市

写真提供：越前市教育委員会所蔵

た、此時財産は十萬兩もあつたといふ素晴らしい大盡※であつた。相續の際人に語つて「我れ生れ得て人となり常に學問を愛好す、願くは我が家産の全部を擧げて此武生藩の學事に致さん、此れ我が一生の願望なり。」と云つた。

《松井耕雪翁遺徳顕彰会編『松井耕雪翁傳』、「翁についての追懐談 齋藤修一郎」より》

episode 2

# 経済人として福井藩の財政立直しを支える

明治元（1868）年、耕雪は福井藩の福井物産総会所の総代に任命されました。物産総会所は、殖産※産業の振興を図る拠点として横井小楠や由利公正の指導で開設されたもので、事業は軌道に乗り、藩の財政立直しに大きく貢献していきます。

P96参照
P126参照

そうした経済人としての耕雪の人物像を物語る記述が、杉田定一の回想の中にあります。福井県出身の政治家として活躍した定一は、子どもの頃、儒学者でもあった耕雪に学んだ一人でした。

P154参照

松井耕雪は、鎌を商う商人であったが、学問ができて国家の秩序を整える才能があったから、武士の子弟らは松井の門人となった。明治時代になって太政官にて立派に働いた。福井に総会所ができるとリーダーとなって産業の育成に努めた。特に桑や茶などを奨励して植樹させた。藩には、産業育成の資金がなかったので、松井は藩札（福井藩のなかで通用する紙幣）をつくって運用し、その藩札にて桑や茶の苗木を植え付けた。藩札を乱発したので、一部の人から藩の財政破綻をまねくとして反対論がおこると、松井は次のように言った。「資金のないところに、過剰に紙幣を発行して苗木を買うので、不換紙幣（あまり価値のない紙幣）と考えられるが、藩札に相当する苗木がちゃんと成長し、それが後に大きな利益を生み出すのである。よって、これは不換紙幣ではない。この藩札によって産業が育成されるのだから、立派な兌換紙幣（価値のある紙幣）ではないか」と。このように松井の産業育成への反対者に対して論破したことは、松井の活き活きとした性格を表わしている。

《松井耕雪翁遺徳顕彰会編『松井耕雪翁傳』、「翁についての追懐談 杉田定一」より要約》

また、府中の産業や文化の発展に貢献した人物として、耕雪は、山本怡仙、松村友松とともに、幕末から明治の「府中三人衆」とも呼ばれます。耕雪は山本怡仙の従兄であった歌人の橘曙覧とも交流があり、曙覧の『志濃夫廼舎歌集』には耕雪からもらった火桶（火鉢）を詠んだ歌が2首あります。

P108参照

府中の松井耕雪が大きなる黒木もてつくりたるひをけくれけるを、膝のへにすゑおき、肱もたせ頬づゑつき、朝夕の友とす

撫やまぬ火桶のいろにならひもてみがきをゆかむうたの上をもよそありきしつゝ帰ればさびしげになりて火桶のすわりをる哉

《橘曙覧『志濃夫廼舎歌集』より》

※大盡…富豪・資産家。大尽と同意（盡は尽の旧字体）
※殖産…産業を盛んにし、生産を増やす。

## check for 松井 耕雪


『武生の歴史』武生市教育委員会
『松井耕雪翁傳』松井耕雪翁遺徳顕彰会
井上和治ほか『逍遥園　在りし日の武生の文化サロン』武生ルネサンス出版部
『逍遥園　襖の下張り展資料集』越前市武生公会堂記念館
雑賀鹿野編著『杉田鶉山翁』
上坂紀夫『自由自在』ひしだい書店
『福井県史』通史編 4 近世二・通史編 5 近現代一　福井県


**こぼれ話**

かつて越前市の日野川近くに、耕雪が幕末に建てた「逍遥園」という別邸がありました。約 400 坪の敷地の中に池を配した美しい庭や建物があり、松平春嶽や橘曙覧、鳩居堂らが集まって詩作に興じるなど、文化サロンのような場所だったといわれ、詩や画の才能を持っていた耕雪の文化人としての側面をうかがわせます。

# 村田氏寿（むらたうじひさ）

1821年～1899年

**福井藩主松平春嶽（まつだいらしゅんがく）の側近。橋本左内（はしもとさない）とともに藩校の充実や徳川慶喜（とくがわよしのぶ）の将軍擁立（ようりつ）に力を尽くす。維新後、初の福井県知事、岐阜県知事となる。**

どんな子だった？

## 漢学者の家系に育った秀才

氏寿は、福井藩主の松平春嶽（まつだいらしゅんがく）（P124参照）の側近として活躍し、明治維新後に福井県の最初の知事（当初は参事）になった人物です。坂本龍馬の手紙に名前が登場していることでも知られ、そこでは村田巳三郎（みさぶろう）と記されています。巳三郎は、子どもの頃からの名前で、村田家は代々当主となった人物の名に「氏」の字を使うことから、巳三郎も後に氏寿としています。

巳三郎は、福井城下の城之橋町（福井市城之橋町）で生まれました。村田家は初代福井藩主の結城秀康（ゆうきひでやす）（P52参照）の時代から漢学者として仕える家系でした。そうした環境に育った巳三郎は、幼い頃から秀才との評判が高い子どもでした。

episode 1

## 開明派の藩主とともに積極的に改革にあたった側近

嘉永6（1853）年、巳三郎が33歳の時、ペリー率いるアメリカ海軍の艦隊が浦賀にやってきました。この黒船来航の話が福井に伝わると、巳三郎は若い福井藩士50人を誘い、武者修行と称して江戸へ出かけますが、到着した時にはすでに船が去っていました。しかし、翌年、チャンスが巡ってきます。ペリーが再び来航した際、品川の警備にあたった福井藩は、巳三郎にアメリカ軍艦内の偵察を命じます。巳三郎は、飲料水の輸送船に便乗して軍艦に乗り込むことに成功。内部を詳しく観察して藩に報告しています。

安政3（1856）年には、藩校の明道館（県立藤島高校）の教師に任命され、翌年3月、横井小楠（よこいしょうなん）（P98参照）を教師に迎える交渉の役目を担い、熊本へ向かいます。福井藩主の松平春嶽は、藩や国の政治には優れた人材が必要と考えて教育に力を入れ、優秀な学者を探していたのです。そして、梅田雲浜（うめだうんぴん）（P112参照）を通じて紹介されたのが小楠でした。巳三郎は小楠を訪ね、本人との交渉は成功しますが、熊本藩は小楠が過激な発言で問題を起こしていることを理由に渋り、結局、交渉はうまくいきませんでした。

しかし、この旅にはその目的の他に、もう一つ別の目的を持っていました。巳三郎は精力的に諸藩を巡り、その状況を観察して記録しています。鹿児島まで足を延ばした際には、薩摩藩（鹿児島県）の西郷隆盛（さいごうたかもり）にも会っています。薩摩藩と福井藩は、ともに一橋慶喜（ひとつばしよしのぶ）を将軍に推す同志のような関係にあり、巳三郎と

ゆかりの地
（県内）福井市
（県外）東京都　京都府

写真提供：福井市立郷土歴史博物館所蔵

西郷は夕食を共にし、国事について語り合いました。

また、薩摩や肥前（佐賀県）で大砲をつくる反射炉などを視察し、長崎では航海術の稽古を見学。巳三郎は、外国に負けない軍備のためにも、航海術を身につけるためにも数学が非常に重要であることを痛感します。福井に戻った巳三郎は、「数学之儀は人生必用之一科」と説き、藩校に「算科局」を設けるよう提案します。

その後、ようやく小楠が正式に福井にきたのは、安政5（1858）年4月のことでした。こうした藩校の改革は、巳三郎と橋本左内（P130参照）が中心となって推し進めました。左内は、後に安政の大獄で刑死した福井藩士で、巳三郎より13歳下でしたが、二人は親友のように理解し合い、春嶽の一橋慶喜の将軍擁立にも大きな働きを見せました。

episode 2

## 西郷隆盛や坂本龍馬にも信頼された人柄

巳三郎の名は、幕末に活躍した人々の手紙の中に、よく見られ、その内容から巳三郎が藩主の側近として、非常に信頼されていたことがわかります。巳三郎が西郷隆盛を訪ねた翌日には、西郷が初対面で胸の内をすべて話したことを恐縮しているという手紙を巳三郎に出したのと同時に、薩摩藩主の側近に対して、巳三郎が藩主の島津斉彬にすぐ会えるよう依頼する手紙を出しています。

また、坂本龍馬の手紙では、潜伏中の龍馬と巳三郎が国事に関することを話し合ったことがうかがえます。また、平成26（2014）年に発見された『越行の記』と題した龍馬の手紙の草稿にも、巳三郎が登場しています。龍馬が暗殺される11月15日までの10日間に書かれたもので、土佐藩（高知県）の後藤象二郎に充てたものです。一部を現代文で紹介しましょう。

30日の朝、村田巳三郎が来ました。用向きを問うので、近頃の時勢などを申し上げた上で越前藩の意見をうかがい、明白な国論を海外までも聞かせなければならないと考えていることを伝えました。この度こそ私たちも国論を伺うことを心から願っています。

村田はこう言いました。「老主人（春嶽）の出京は来月2日に決まったが、多忙なのでお目にかかれなかった。しかし、お尋ねのことは、拙者（村田）より申し上げる。そうなれば、老主人出京後、かれこれ手順もあるが、将軍家が政権をお返ししたとなれば、将軍の職もお返ししなければ、とても反省していると申しても天下の人心の折り合いがつかない。」これが越前の考えです。

この手紙の後半には、龍馬が考える新しい政府の要人として、福井藩士の由利公正（P126参照）を推薦することが記されています。

そして、訪れた明治維新。明治4（1871）年の廃藩置県後は、福井県参事（知事）に任命され、その後、明治政府の内務大丞兼警保頭という役職に就任しました。

※安政の大獄…安政5（1858）年から翌年にかけて、尊王攘夷を唱える者に対して、大老の井伊直弼が行なった弾圧

※内務大丞兼警保頭…内務大丞は内務省の前身。警保頭は警察局の前身

check for 村田 氏寿


藤田道男『村田氏寿（巳三郎）小伝』藤田道男
高木不二『明治維新の人物と思想』『越前藩士村田氏壽論』［抜刷］吉川弘文館
明治維新史学会編『明治維新の人物と思想』吉川弘文館
村田氏寿・佐々木千尋編『続再夢紀事』（日本史籍協会叢書 106 復刻版）東京大学出版会
福井新聞社編『福井人物風土記　ふくい百年の群像』昭和書院
村田氏寿『関西巡回記　村田氏寿手稿』（永井環編）三秀舎
宮川禎一『坂本龍馬からの手紙　全書簡現代語訳』教育評論社
『福井県史』通史編 4 近世二　福井県


こぼれ話

村田家は古くは足利氏の一族であったといいます。その後、松平家の家臣となり、徳川家康に仕えます。家康の側室で結城秀康を生んだ於万の方は村田家の娘でした。そうした縁で、巳三郎の先祖は初代福井藩主の結城秀康の家臣として、結城（茨城県結城市）から福井にやってきました。

# 伊藤慎蔵

1825年?～1880年

**長州（山口県）出身の洋学者。緒方洪庵の適塾に学び、塾頭を務める。越前国大野藩（大野市）の洋学館教授として藩士の蘭学教育に貢献。**

どんな子だった？

## 外国語もすぐに覚えてしまう記憶力の持ち主

慎蔵の出身地は長門国萩藩（山口県萩市）。若い頃の名は精一といい、町医者をする伊藤宗寿の子として誕生しました。少年期のことはわかっていませんが、嘉永2（1849）年に緒方洪庵が主宰する大坂の適塾に入門します。同じ年、福井藩士の橋本左内（P130参照）も適塾に入っています。

適塾での慎蔵は、記憶力に優れ、博識で論文の成績は常に首位。難解な外国語もすぐに解読するほどの秀才ぶりを発揮したといいます。そうした慎蔵でしたが、一度、塾を破門されたこともありました。許されて塾に戻ると塾頭に抜擢。そして、塾頭になった翌年、大野藩（大野市）に蘭学教授として招かれます。

episode 1

## 西洋の技術や学問を取り入れる気風に満ちた大野藩へ

江戸時代後期の大野藩主、土井利忠（P106参照）は、江戸の大野藩邸に杉田玄白の孫を招いて、ヨーロッパの事情を尋ねるなど、西洋の進んだ学問や技術に強い関心を抱いていました。

天保14（1843）年に藩校の明倫館を創設し、越前内の他藩にさきがけて蘭※学の講義を導入します。「有益な書物は価格を論じないで（金銭を惜しまず）購入し、学校の蔵書とする」と断言するほど学問を重視していた利忠は、西洋の進んだ学問を身につけた優秀な藩士を育てるために、安政2（1855）年、大坂の適塾の塾頭をしていた慎蔵を大野に招きます。そして、数ヶ月後に新たに「蘭学所」（後の「洋学館」）を創設。『福井県史』は、大野藩の蘭学振興の目的や経緯について、次のように解説しています。

安政二年十二月九日、慎蔵は内山隆佐に伴われて大野にやってきた。翌十日には藩主利忠へのお目通りがかなっている。また、十一日には山崎譲・西川貫蔵も帰藩している。彼等はこの後、助教として慎蔵のもとで藩の蘭学指導に当たることになる。同三年二月二十六日には慎蔵が禄一〇〇石を給せられ、蘭学教授に任じられている。（中略）また、海防や地震により大破した江戸屋敷の修復などで出費がかさむ中で、一〇〇石の知行と一時金五〇両を与えるなど、慎蔵に対する期待の程がうかがわれる（「大野藩庁用留」）。これ以降慎蔵は、文久元年（一八六一）

ゆかりの地
（県内）大野市
（県外）山口県　大阪府　兵庫県　東京都

に辞去するまで蘭学振興の中心にあった。

大野藩では、蘭学修行の目的は西洋技術の修得と実践であるととらえられており、このことはとくに蝦夷地「開拓」に生かされている。（中略）さらに安政三年五月には、いったん入門した者は漢学・蘭学とも簡単にやめてはならないという諭達がなされるとともに、新たに蘭学館が開設され、慎蔵はその教授方を命じられた。また慎蔵は同年十一月には「明倫館御貯蔵之蘭書類預り」を仰せ付けられ、「外塾書生取扱之儀万端」を任されている（「大野藩庁用留」）。

《『福井県史』通史編4近世二より》

大野藩の洋学奨励は、砲術や航海術などの実用的な知識や技術の習得にありました。そして、これが利忠による藩政改革に、大きな影響を与えるものとなったのでした。

episode 2

## ほかの藩からも塾生が続々と入門

慎蔵に教えを受けた生徒は130名あまりにも及び、その中には、適塾の緒方洪庵の息子たちもいました。

「各藩ヨリ大野洋学館へ入学人名録」（土井家文書）によると、安政二年から五年までの間に、丸岡・勝山・大聖寺・府中などの近藩はもとより、肥前佐賀藩や豊前中津藩など全国各地から留学生が集まってきている。この「人名録」と大坂適塾の門人帳である「適々斎塾姓名録」（『緒方洪庵伝』）を比べると、共通する人名がみえる。その中には、適塾で学んでさらにその後で大野にやってきている者がいる。また、「人名録」の中には緒方洪庵の二子、平三と四郎の名も見える。彼等は、洪庵の命で加賀大聖寺藩医渡辺卯三郎（うさぶろう）のもとで漢学を学んでいたのだが、洋学館開設のことを聞くと居ても立ってもいられなくなり、そこを飛び出して、慎蔵を頼って大野にやってきた。

《『福井県史』通史編4近世二より》

こうした大野藩以外からの蘭学修行者の中に、越前国坂井郡本荘（あわら市）で代々医者を営む家の藤野昇八郎（ふじのしょうはちろう）という人物がいました。慎蔵は4歳上の昇八郎と適塾時代から親しく、心の友とも言える親友でした。慎蔵と昇八郎がやり取りした手紙が何通も残っています。ちなみに昇八郎の三男は、中国近代文学の父とされる魯迅（ろじん）の自伝小説『藤野先生』でも知られる**藤野厳九郎**（ふじのげんくろう）です。P.168参照

文久元（1861）年、慎蔵は大野藩を退いて適塾に戻り、その後、摂津国（せっつのくに）名塩村（兵庫県西宮市名塩）、そして、東京へと移り、55歳でその生涯を閉じました。

※蘭学…江戸時代にオランダを通して日本にもたらされた西洋の学問。「蘭」の字は、オランダを和蘭陀（おらんだ）と漢字表記したことによる

### check for 伊藤 慎蔵

『土井利忠公とその家臣たち』上巻　大野市
岩治勇一『大野藩の洋学』
『奥越史料』第7号　大野市教育委員会
天野俊也『伊藤慎蔵と大野藩』
『若越郷土研究』第14～15巻　福井県郷土誌懇談会
『福井県立大野高等学校　研究紀要』第17号　福井県立大野高等学校
『福井県史』通史編4近世二　福井県

こぼれ話

親友の藤野昇八郎に慎蔵が送った何通もの手紙の中で、安政6（1859）年11月末の手紙には、橋本左内のことが書かれています。橋本左内が刑死したことを聞き、悲歎に堪えず、左内ほどの人がなぜ悪い考えを持つ者と同じにされるのかと、嘆き悲しむ気持ちを昇八郎に訴えています。

# 松平春嶽（慶永）

1828年～1890年

**越前松平家16代当主。破綻寸前の藩財政を再建し、洋学振興に努め富国強兵や公武合体などの幕政改革にも活躍した幕末の四賢侯の一人。**

どんな子だった？

## 11歳の時、越前松平家の養子に入る

春嶽は徳川御三卿※の田安家の八男として、江戸城内の田安屋敷で生まれました。天保9（1838）年、11歳の時、越前松平家の養子に入り、福井藩の第16代藩主となりました。ほどなく元服して名前を錦之丞から、12代将軍徳川家慶の一字をもらい慶永と改名（春嶽という名は号。今で言えばペンネームにあたるものです。本書では春嶽の名を用います。）

春嶽は、学問に熱心な福井藩の中で、藩主としての教養を身につけるばかりでなく、先進的な考え方を身につけ、若くして名君と呼ばれるまでになります。

episode 1

## 自らの節約から藩の財政建直しに着手

春嶽が藩主となった頃の福井藩は、借金まみれの危機的な財政状況にありました。破綻寸前の藩を11歳の小さな肩に背負った春嶽は、翌年から教育係の中根雪江（P92参照）とともに財政立直しに着手します。後に雪江が著した『奉答紀事』によると、春嶽が藩の財政状況に心を痛めて、藩主が使ってよいお金を半分にしたのが、倹約の手はじめとなったと書かれています。

こうした自らの倹約は、実は春嶽にとって当たり前のことであったのかもしれません。というのも、後に春嶽自身が田安家にいた頃を回想した話には、こんなことが記してあります。

「慶永幼稚履歴記憶録」（福井市春嶽公記念文庫）に、

> 余の田安家にある時の模様を云はんに、（中略）書物、大学・論語・読書の本買入る事成らず、借用して稽古す……筆は一月に二本、墨は二月に一挺……其他ほしき物あるとも買入る事能はず、
>
> などと見えるように、質実簡素、きわめて厳格な家風を守っていた。
>
> 《『福井県史』通史編4近世二より》

右の回想録には、質素で厳格、学問を重んじる田安家の気風も見られ、それを受け継ぐ春嶽は、贅沢をせず、また、西洋の学問を積極的に学び、藩の政策に活かすことを考え始めます。

ゆかりの地
（県内）福井市
（県外）東京都　京都府

写真提供：福井市立郷土歴史博物館所蔵

そして、優秀な人々の知恵を集結し、新しい産業を起こして藩の収入を大きく増やすとともに、藩校の明道館を創設し、洋学教育にも力を入れました。

こうした新しい藩政のシンクタンクとして、とくに大きな活躍を見せたのが、熊本から招いた横井小楠（P98参照）、福井藩士の橋本左内（P126参照）と由利公正（P126参照）でした。福井藩は財政の立て直しに成功し、経済力、政治力、そして、幕府での発言力ともに全国屈指の有力な藩となっていきます。

episode 2

# 春嶽が考えた新時代の名前は「明治」

藩政だけでなく、幕政改革にも取り組んだ春嶽について、『図解福井県史』がわかりやすくまとめています。

一八五三年（嘉永六）アメリカ太平洋艦隊が浦賀に入港し、日本に開国を迫りますが、慶永は、強硬な鎖国攘夷論をとなえ、軍備の増強を主張しました。しかし、アメリカ総領事ハリスが通商条約の締結を幕府に迫った五七年（安政四）には、世界の形勢を考え、鎖国を続けるのではなく開国し、積極的に海外へも乗り出すべきだとの開国論へと転じ、幕府の政治にも積極的にかかわるようになりました。

五八年には、慶永は、朝廷の許可なく幕府が通商条約を結んだことや将軍の跡継ぎの問題で大老井伊直弼と対立し、隠居を命じられました。これを機に、多くの尊王攘夷派の志士たちが幕府の弾圧を受けますが、そのなかには慶永の手足として働いた橋本左内や小浜藩を脱藩した梅田雲浜などがいました。いわゆる安政の大獄です。この安政の大獄には、鯖江藩主の間部詮勝（P90参照）が老中、小浜藩主酒井忠義（P110参照）が京都所司代として深く関わりました。

その後、桜田門外で井伊直弼が暗殺され、将軍家茂と皇女和宮との婚儀がととのうなど、政局に変化がみられるなか、六二年（文久二）四月慶永は謹慎を許され、幕政参与を命じられ、さらに七月には政事総裁職に就き、将軍の後見職に就いた次期将軍一橋慶喜とともに、公武合体を政治路線として、幕政を指導しました。

《『図説福井県史』近世33「松平慶永と幕末の政局」より》

尊王と開国を支持した春嶽は、勝海舟や坂本龍馬にも会い、自身の考えを伝えて活動費用を貸し与えています。その資金には、藩が外国貿易で得た利益があてられたのでしょう。春嶽の考えは、徳川幕府を蔑ろにすることなく、日本を諸外国と対等な国家にすることでした。そして、朝廷と徳川幕府を合体させた一つの政権をつくるために力を尽くします。そして、ついに慶応3（1867）年10月14日、大政奉還へと時代は大きく動きます。

徳川幕府の治世が終わり、やってきた新しい時代の名前は「明治」。その名は日本史上最大の歯車を動かした功労者として、春嶽が提案したものでした。

激動の時代を開くリーダーとして生き、「幕末の四賢侯」と呼ばれた春嶽。明治以降、薩長（薩摩・長州）の活躍が目覚ましく、福井は影が薄いように見えますが、実は、福井藩と春嶽なしに日本の近代国家化は語れないというくらい、重要な役割を果たしたのでした。

※徳川御三卿…第8代将軍徳川吉宗以降、徳川氏の一族から分立した大名の三家。田安家、一橋家、清水家。

## check for 松平 春嶽


白崎昭一郎『松平春嶽』東京新聞出版局
三上一夫・舟澤茂樹編『松平春嶽のすべて』新人物往来社
『福井市立郷土歴史博物館研究紀要』福井市立郷土歴史博物館編
『松平春嶽をめぐる人々』（展覧会パンフレット）福井市立郷土歴史博物館
高木不二『横井小楠と松平春嶽』吉川弘文館
三上一夫『幕末維新と松平春嶽』吉川弘文館
中島道子『松平春嶽』PHP 研究所
『幕末維新最後の藩主 285 人』新人物往来社
中根雪江『奉答紀事』東京大学出版会
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第 4 集　青少年育成福井県民会議
『これき人物シリーズ 3　ふくいの先人たち　幕末』福井県立こども歴史文化館


**こぼれ話**

春嶽は 13 歳の時、熊本藩主細川家の三女で 7 歳の勇姫と婚約します。その直前に勇姫は天然痘に罹り、顔に無数の痕が残りました。そのため細川家は婚約解消を申し出ますが、春嶽は「見た目を気にすることはない」と婚約を解消しませんでした。結婚した二人は仲睦まじく、勇姫は夫のよき理解者として質素倹約に努め、春嶽も勇姫を大切にしていたことが日記からうかがえます。

# 由利公正（ゆりきみまさ）

1829年〜1909年

**抜群の起業家マインドで福井と新政府の財政に尽力。新都東京に欧米のモダンな新風を取り入れた東京府知事。**

どんな子だった？

## 勉強嫌いだった少年が、ある出会いをきっかけに大ヘンシ〜ン

少年時代の由利公正は、机の前にじっと座って書物を学ぶ勉強が苦手でした。しかし、剣や馬は得意で、福井城下を馬で駆ける荒々しい祭り『馬威（うまおどし）』に出たときは、あたりを蹴散（けち）らして先頭を走り、一番になったというエピソードがあります。そんな由利が人生を大きく変える師と出会ったのは、19歳のときでした。福井を訪れていた熊本藩の儒学者、横井小楠から「利益は民のため」という考えを聞き、その思想に傾倒していきます。当時、福井藩士の暮らしは苦しく、倹約する母親の姿を見て育った由利には、一筋の光のように思えたのでしょう。由利は小楠のもとで藩の財政を研究し、財政改革に着手しはじめます。

episode 1

## 「三八を置かば他に二人なかるべし」坂本龍馬最後の手紙より

長崎に福井藩の蔵屋敷をつくり、海外に特産品の生糸を輸出するなど、次々に新しい政策を打ち立て、藩の財政立直しに成功した由利。そうした働きのなかで、由利は人脈を広げていきました。

慶応3（1867）10月30日、三岡八郎（この頃の由利公正の名）は、ある男に会うために城下の莫屋（たばこや）旅館を訪ねました。それでは、小説風にその人物とのやりとりを再現してみましょう。

「三八はん、よう訪ねてくれた。今日は話すことが山ほどあるぜよ」

男は八郎のことを、三岡の三と八郎の八をつなげて三八と親しみを込めて呼び、盃（さかずき）を差し出した。

「わしも会いたかった。あんたはすごいお人じゃ。ついに大政奉還（たいせいほうかん）を成し遂げたのじゃからのう」

八郎は、そう言って盃の酒をいっきに飲み干した。

その男とは坂本龍馬（さかもとりょうま）。土佐藩主山内容堂（やまのうちようどう）の書簡を福井藩主松平春嶽（まつだいらしゅんがく）（慶永（よしなが））に届けるため、越前にやってきていた。

「ほやけど坂本さん、これからが正念場やで。将軍家が朝廷に政（まつりごと）を返したと言うても、新しい政の中身を示さんかったら、誰も信じてくれんざ」

「おまはんの言う通りじゃ。わしは新政府の綱領を以前から作ったが、そろそろ世に示そうと思うきに、三八はんの意見も

ゆかりの地
（県内）福井市
（県外）東京都

写真提供：福井市立郷土歴史博物館所蔵

聞かせとおせ」

龍馬の求めに八郎は、かつて幕府の財政を調べた際に見えた問題点や、福井藩での財政建直しの成功に裏打ちされた考えを語った。

「三八はん、おまはんのような人が、新しい日本を作るがには不可欠。金銀物産等の事を論ずるには、三八はんを置いて他に二人とおらんぜよ。どうか新政府の力になっとおせ」

龍馬は盃を置き、八郎に頭を下げた。八郎は慌てて龍馬へにじり寄り、その肩に手をあてた。

「頭を上げて坂本さん。そこまで言うてもらえるとは有り難い。わしでよければ微力ながら力になるさけ、どうか頭を上げてんでや」

八郎が言うと、龍馬は肩に置かれた八郎の手を握り、

「受けてくれるがか、三八はん。感謝するがで」

龍馬は八郎の目を見つめた。八郎もまた、龍馬を見つめて、（坂本龍馬…、このお人とは、きっと生涯の同志であり、真の友）と確信した。その日、二人は、日本の将来と新政府の具体的な構想について、時が経つのも忘れて語り明かした。

11月3日、龍馬は京都に戻って行きました。帰京後、龍馬は「新政府綱領八策」をしたため、そして、運命の日を迎えます。11月15日、京都河原町の近江屋で襲撃され、龍馬は帰らぬ人になります。

数ヶ月後、新政府の始動とともに、八郎は、龍馬の願いどおり新政府に参画し、金融財政策に手腕を発揮しました。

episode 2

## 福井から東京へ。明治新政府で活躍

明治維新とともに、新しい政治体制づくりが始まり、そのころ、名前を三岡八郎から由利公正に改めました。そして、新しい日本の政治方針を定めるために、由利が「議事之体大意」を起案します。その原案をもとにできたのが、明治天皇が示した新政府の基本方針「五箇条の御誓文」です。「議事之体大意」の一番と二番目の先頭の語句に注目すると、身分の区別なく皆で頑張ろうという由利の民主的な考え方が感じ取れます。

その後、由利は国家財政の建直しに着手。藩の財政改革に成功した経験と持ち前の先見の明をもとに、欧米の列強諸国と対等に付き合える日本の経済基盤をつくり、また、東京府の知事として手腕を振るいます。

議事之体大意

一、庶民志を遂げ　人心をして倦まざらしむるを欲す　（意訳）人々が心に込めたことを成し遂げ、希望をなくさせないようにすることを願う。

一、士民心を一にし　盛に経綸を行ふを要す　（意訳）人々が身分をこえて心を一つにし、どんどん国の経済を豊かにすることが必要である。

一、知識を世界に求め　広く皇基を振起すへし　（意訳）世界から知識を取り入れ、皆で天皇を中心にした新しい国の基礎（国力）をふるい起こすべきである。

一、貢士　期限を以て　賢才に譲るへし　（意訳）新政府の役人は、期限（任期）を定めて才能のある人に変わるべきである。

一、万機公論に決し　私に論するなかれ　（意訳）すべてのことは皆で論議して決め、自分勝手な主張をしない。

《『議事之体大意』より》

check for 由利 公正


三上一夫・舟沢茂樹編『由利公正のすべて』新人物往来社
大島昌宏『炎の如く　由利公正』福井新聞社
森田右一『財政官僚の足跡』近代文芸社
童門冬二『横井小楠と由利公正の新民富論』経済界
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第Ⅰ集　青少年育成福井県民会議
『ふるさと福井の人々』福井市教育委員会
『これき人物シリーズ3　ふくいの先人たち　幕末』福井県立こども歴史文化館


こぼれ話

2014年、龍馬の最後の手紙か!?と話題を呼んだ発見がありました。龍馬が越前から戻った11月3日から暗殺された15日の間に、後藤象二郎へ宛てて書いた手紙の下書きで、そこには、三岡八郎を新政府の人材として強く推挙しています。

# 佐々木長淳（権六）

1830年～1916年

**福井藩士、新政府の技術者。武器や帆船づくりから工場建設養蚕や紡績まで、多彩な才能を発揮し、近代繊維産業の礎をつくる。**

どんな子だった？

## 小さい頃から絵が得意だった少年

長淳は石高200石の中級くらいの福井藩士の家に生まれました。幼い頃の名は鉄五郎といい、大人になってからは、権六という通称で呼ばれることもありました。

長淳は絵を描くのが好きな少年でした。ものごとを細かく観察する力が幼い頃から養われていたのでしょう。大人になると様々な西洋の機械をスケッチして研究し、設計や製造に活かしています。

安政の大獄で処刑された橋本左内（P130参照）とは親戚関係にあり、少し年下の左内と幼なじみで、長淳が15歳の時、二人で将来を語り合ったこともありました。左内が亡くなった後には、長淳が左内の肖像画を描いています。

episode 1

## 長剣術の名手が、西洋式の機械をつくる技術者に

長淳は19歳の時、長剣術の修行のために江戸に出ました。その腕は相当なもので、福井藩士の中根雪江（P95参照）からは「勇邁の気性あり」（勇敢な気質がある）と称されています。また、嘉永6（1853）年、23歳の時には、江戸で大砲や鉄砲を学んでいます。

ちょうどその年、日本じゅうを揺るがす大事件がありました。ペリーが浦賀にやってきた、いわゆる黒船来航です。そして翌年、再び来航した際には、福井藩が周辺の警備を幕府から命じられました。その時、長淳は偵察役として黒船に乗り込むことに成功。船内で見たものをスケッチし、また、アメリカ人に剣の腕前を披露したといいますから、中根雪江が見抜いていたように、確かに勇敢な気質の持ち主だったようです。

この頃、福井藩は、頻繁に訪れる外国船を警戒し、外国からの侵略を防ぐために、大砲や鉄砲の導入を計画していました。そうした藩の動きの中で長淳は、後の由利公正（P126参照）とともに重要な任務に就いています。

嘉永六年には洋式小銃の製造も着手される。（中略）翌安政元年には、福井泉水邸内に製銃工場を設置したが、製法の未熟と資金不足から、三か年にようやく一〇挺を生産するに過ぎなかった。そこで安政四年正月に至り、佐々木権六・三岡八郎（由利公正）を製造所正・副の頭取に任命し、本格的な兵器生産を

ゆかりの地
（県内）福井市　坂井市三国町
（県外）東京都　神奈川県

写真提供：福井市立郷土歴史博物館所蔵

推進させることとなる。二人は種々研究を重ね、志比口に鉄砲製造所を、松岡に火薬製造所を建設し、工程を分業して職工の熟練を図るなど増産に成功した。他藩の注文にも応じて、維新後製造所閉鎖までに七〇〇〇挺の洋式銃を製造したと伝えられる。

《『福井県史』通史編4近世二第六章より》

また、銃の研究や製造とあわせて、洋式帆船の建造から帆船を就航させるための港づくり、オランダ語の軍事書の翻訳にも携わっています。

嘉永6年（1853）9月大船建造の解禁が解かれたのを機に、福井藩ではコットル型洋式帆船の建造を図り、安政4年（1857）秋、三国宿浦（坂井市三国町宿）において、本格的な造船作業を開始した。これより先、安政3年権六は藩命により出府し造船に関する原書類を調査の上、長さ1m程の船の模型を製作した。これを土佐の中浜万次郎に見せ改良を重ねるなど、当初から帆船の建造に深く関与しその中心となり取り組んだ。権六は安政4年1月御製造方頭取に任ぜられ、安政6年（1859）4月、長さ11間、幅3間半、深さ2間7寸、16人乗り2本マストの洋式帆船を完成・進水させた。

《温井眞一著『佐々木長淳の生涯と業績』より》

episode 2

## 多彩な才能で、繊維産業の発展に貢献

実は長淳が製造に関わったものは、軍事関連だけでなく、ほかにも驚くほど幅広い分野にわたっています。とくに長淳の業績の中で、後世にまで続く大きな功績を残したのが、繊維産業の近代化でした。

帆船づくりと同じ年、長淳は西洋の織物技術を研究する役目も任じられます。そして、慶応3（1867）年、アメリカに渡り、最新式の武器や織物の機械を福井にもたらしました。

時代が明治になると、長淳は東京に移り住み、養蚕や紡績関係の官僚として新政府に参加。養蚕や紡績の研究調査と指導を行い、蚕の病虫害研究にも力を注ぎます。それだけでも一人で何役もの働きぶりですが、ウイーン万国博覧会に日本館を建設する際の責任者も務め、さらに、現地で指揮をとるかたわら、ヨーロッパの養蚕や紡績の最新技術まで視察しています。そして、帰国後には、群馬県新町（群馬県高崎市）に「新町屑糸紡績所」を建設する責任者となり、日本人による初の近代的工場を実現しました。その建物は、今も同地で創業当時の面影を残して保存されています。

マルチな才能を発揮し、日本の近代化に尽くした長淳。その生涯は87歳で幕を閉じますが、長淳の志は息子の佐々木忠次郎P162参照に受け継がれます。昆虫学者となった忠次郎は、近代養蚕学や製糸学の先駆者として、父と同じように近代繊維産業の発展に大きな功績を残しています。

※出府…地方から江戸に出ること。
※中浜万次郎…出漁中に遭難してアメリカの捕鯨船に救われ、アメリカで教育を受けた後、帰国。幕府の通訳や英語の教授として活躍。井伏鱒二の小説によって「ジョン万次郎」の名で知られる。

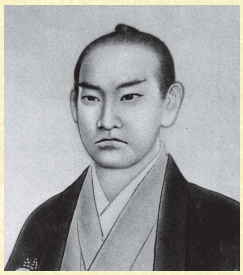
### check for 佐々木 長淳


温井眞一『佐々木長淳の生涯と業績』よみがえれ！新町紡績所の会
『福井県文書館資料叢書　福井藩士履歴』福井県文書館
友田清彦『明治の蚕業指導者佐々木長淳と「蚕事学校」構想』東京農業大学農業経済学会
土金師子『明治初期養蚕政策と佐々木長淳』日本女子大学史学研究会
『福井県史』通史編4近世二・通史編5近現代一　福井県
『これき人物シリーズ3　ふくいの先人たち　幕末』福井県立こども歴史文化館


こぼれ話

日本で初めて「ビラスビイデ独行車」という自転車を組み立てたのも長淳でした。また、「新町屑糸紡績所」の建物は、長淳がウイーン万博の日本館建設に赴いた際、スイスの紡績工場で紡績技術を習得し、帰国後、基本計画書を作成したものでした。

# 橋本左内



1834年～1859年

**15歳の時、『啓発録』を著す。松平春嶽の右腕として藩政改革を行い国政や外交問題に奔走するも安政の大獄で斬首となる。**

どんな子だった？

## 本から多くを学び、高い志をつらぬく強い心を育む

左内は藩医の子として福井城下の常盤町（春山2丁目）に生まれました。左内は幼い頃、勉強しても成果が出ないと悔やみ、毎晩、布団の中で泣いていたといいます。しかし、本当に勉強ができなかったのではなく、それだけ自分に厳しい考えを持っていたのです。10歳の時には中国の歴史書『三国志』を読破したほどでした。15歳になった左内は、目指すべき生き方や志を5項目にわたって書き留めた『啓発録』を著します。多くの書物に親しみ、そこから理想とする人間像を思い描いていたのでしょう。『啓発録』は、大人になる自覚を持った左内が、自身に課した厳しい行動規範だったのです。

episode 1

## 西郷隆盛らに賞賛された才能

16歳になった左内は大坂に出て、緒方洪庵の適塾で医学と蘭学を学びました。左内はすぐに頭角を現し、群を抜いて優秀だったといわれます。ところが、そんな左内が夜遅く帰るようになり、夜遊びをしていると噂をされ、心配した洪庵が調べてみると、左内は貧しい人々を診察していたというエピソードも残っています。

嘉永5（1852）年、父親が病に倒れたため、左内は福井に戻ります。父親が亡くなると、藩医を継ぎましたが、向学心を抑えきれず、2年後、江戸に出て、杉田玄白（P.81参照）の孫である杉田成卿に入門。成卿が外国の書物を与えて学力を試すと、1ヶ月で理解し、質問にひとつの誤りもなく答えました。成卿はその才能に驚き、「わが学業を継ぎ得るものは必ずこの人である」と讃えました。また、福井藩の鈴木主税が水戸藩の藤田東湖を訪ねた際、「人材がいない」と嘆くと、東湖は「橋本がいるではありませんか」と即答しました。それを聞いた主税は、福井藩主の松平春嶽（P.124参照）に、藩の政治に左内を参画させるよう薦めます。こうして左内は、藩主の右腕として活躍し始めます。ある日、左内が江戸の薩摩藩邸に西郷隆盛を訪ねた時の西郷の感想が、新渡戸稲造の『自警録』に書かれています。

> 西郷南洲が始めて橋本左内に会うたとき、こんな柔しい男が何で国事を談ずるに足るだろうかと、心ひそかに軽蔑したこと

ゆかりの地
（県内）福井市
（県外）東京都荒川区（元小塚原刑場）

写真提供：福井市郷土歴史博物館所蔵

を、後にいたって自白している。さもあったろうと思う。聞くところによれば橋本という人は、外見はまことに温和に柔順な好男子であったから、この人の心情を知らぬものは、この柔順らしい皮の下に、いかに燃ゆるがごとき熱血が流れつつあったかを悟ることが出来なかった。

《新渡戸稲造著『自警録』より》

西郷は常に「先輩に於いては藤田東湖に服し、同僚に於いては橋本左内を推す」と話していました。また、西郷が亡くなった後、愛用の鞄を開けると、左内からの20年も前の手紙が出てきました。西郷はどこに行くにも、それを大切に持っていたのです。

episode 2

# 井伊直弼に恐れられた左内、その最期の涙とは

24歳で福井藩の藩校「明道館」の学監同括心得となった左内は、教育改革や藩政改革に着手。そして、江戸と京都を往復し、身分を問わない有能な人材による政治体制への改革や、富国強兵策を精力的に説いて回りました。しかし、その動きを恐れる人物がいました。安政5（1858）年、大老の井伊直弼が自分の考えに反する者を厳しく取り締まり、安政の大獄が始まった翌年の10月7日（旧暦）、左内は斬首刑に処せられます。その時の様子が『偉人暦』には、次のように語られています。

左内その日春嶽候から贈られた新衣を着し、狭い獄中から出るにも裃の折目正しく、粛然として刑刃を受けた。その落ちついた態度には獄吏も敬意を払わずにはいられなかったという。享年わずかに二十六。

維新の志士の中でも彼の如く若くして逝いて、そして先輩や同輩から彼の如く敬慕された人物は珍しい。

《森銑三著『偉人暦 下』より》

また、役人が刀を振り上げた時、「しばし待て」と刀を押し止め、藩邸のある方角を拝してから、泣いたという話も伝わります。小説『城中の霜』では、従兄妹で幼なじみだった娘の言葉で涙の理由を明かしています。

多少なり御国のために働くほどの者が、其の場に臨んで、命が惜しくて泣くと思召しますか、……未練で泣くと思召しますか、（中略）断頭の刃を押止め、静かに面を掩って泣く勇気は、左内さまだから有ったのです、（中略）卑怯でも未練でもない、否えもっとお立派な、本当の命を惜しむ武士の泪だということが、わたくしには分ります

《山本周五郎著『城中の霜』より》

多くの志士が左内の死を悼みました。安政の大獄で同じ獄舎に捕えられていた吉田松陰は、獄中で綴った『留魂録』で、左内の素晴らしさを述べ、「左内を甦らせて議論をしてみたいと思うが、左内はもうこの世にいない。ああ、残念なことだ」と悲しんでいます。さらには、水野忠徳という幕臣までもが「井伊大老が橋本左内を殺したる一事、以て徳川を亡ぼすに足れり」と述べています。そこまで言わしめ、敬愛と期待を集めていた橋本左内。もし激動の幕末を生き抜いていたなら、その後の日本史は、違った道を歩んでいたかもしれません。

## check for 橋本 左内


『啓発録　付　書簡・意見書・漢詩』（伴五十嗣郎全訳注）講談社
山口宗之『橋本左内』吉川弘文館
白崎昭一郎『橋本左内』毎日新聞社
新渡戸稲造『自警録』講談社
山本周五郎『城中の霜』新潮社
吉田松陰『留魂録』（古川薫全訳注）講談社
森銑三『偉人暦　下』中央公論社
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第Ⅰ集　青少年育成福井県民会議
『これき人物シリーズ３　ふくいの先人たち　幕末』
福井県立こども歴史文化館


こぼれ話

『啓発録』
稚心を去る…子どもじみた甘えを脱却せよ。
気を振ふ…負けまいと強く気を振い起こせ。
志を立つ…目標を揺ぎなく定め精進せよ。
学に勉む…優れた人物を見習い実行せよ。
友を択ぶ…自分の向上に繋がる友を選べ。
※点線以下は各項目ごとの趣意を要約

# 関義臣（せきよしおみ）

1839年～1918年

**府中（越前市）出身の福井藩士。坂本龍馬の亀山社中、海援隊に所属。維新後は知事や貴族院議員など重職を歴任し、男爵となる。**

どんな子だった？

## 武芸と学問に励み、橋本左内に才能を見いだされて江戸へ

坂本龍馬が率いる亀山社中と海援隊の若者たちの中には、越前国出身者もいました。その一人である関義臣は、明治維新後には政治家として手腕を発揮し、一地方の藩士から男爵にまで登り詰めた人物です。

もとの名前は山本龍次郎といい、福井藩の筆頭家老を務める本多家の家臣の二男として、府中城下（越前市）で生まれました。8歳の時、福井城下に住む親戚に預けられ、武芸や砲術の修行を始めます。そして、藩校の明道館に入り、橋本左内（P30参照）に才能を認められます。23歳の時には、江戸に出て、全国から秀才の集まる昌平坂学問所に入り、舎長にもなりました。

episode 1

## 江戸の情報を藩へ送る探索方として活動

福井藩の様々な史料を集めた松平文庫（福井県立図書館保管）の中に、探索方の報告をまとめた『風説書』という史料があります。探索方とは、情報収集などをする任務を与えられた藩士たちで、その史料には、江戸にいた義臣からの情報も記されています。義臣は昇平坂学問所で学びながら、江戸の情報を福井藩に報告する任務を持っていたのです。元治元（1864）年の暮れ、軍艦奉行を罷免された勝海舟を義臣が訪ねた際の報告は、次のような内容でした。

突然の江戸召喚で金銭的に困っていた勝が、大坂町奉行に預けてある、昨年福井藩から借りた500両ばかりのうち、300両をあらためて借りたいというのに対して、龍次郎（義臣）は、この金は最初から返済の当てはしていないはずと答えたことを報告しています。

また、何に使っても頓着しない、ほかに入用ならば、いつでも国許へ言うようにと伝えたと報告し、また、勝は尋常な方法では受け取らないだろうから、松平春嶽（P26参照）の思召しとして手許金から書生賄料（米二百俵ばかり）を贈ってほしいと頼んでいます。

《福井県文書館企画展示「福井藩士の記録」パンフレットより要約》

その後、義臣はいったん福井へ戻りますが、途中、国内事情を調べるため遠回りをして東北や蝦夷地（北海道）を巡り、各

ゆかりの地
（県内）越前市　福井市
（県外）東京都　長崎県　鳥取県　徳島県　山形県　京都市

写真提供：越前市教育委員会所蔵

藩の志士たちと交流しています。藩士が勝手に旅をすることはできないため、これも探索方としての任務であったのかもしれません。

慶応2（1866）年、福井へ戻った義臣は、藩の方針と自身の考えが異なることを実感すると、その年のうちに、英語の習得を名目にして京都に出ます。その頃の福井藩は、幕府と朝廷を一つにした政府の確立（公武合体策）に力を注いでいました。しかし、諸藩の団結が難しく、行き詰まりを見せており、過激な倒幕思想に傾いていた若い義臣には、藩のやり方を受け入れることができなかったのです。

京都に出た年の12月、義臣は自分の考えを記した意見書を携え、長崎に坂本龍馬を訪ねました。そして、龍馬の亀山社中に入り、また、海援隊の隊士となりました。後に義臣の孫が、義臣から聞いた回想談を『海援隊の回顧』にまとめています。そこには義臣の目を通した龍馬の姿も記されています。

龍馬は、小事にこだわらず、一切、うわべを飾らず、人との交際は、とても温厚で厭味というもの一点も無く、婦人も馴れ、童子も親しむ。

相手の話を黙って聴き、否とも応とも、何とも言わず、さんざん人に饒舌に語らせておいたあとに「さて拙者の説は」と説き出し、こまごまと数百千言も話し、時々、滑稽な話を交えて、自ら大笑いする。誠に天真の愛嬌家であった。

《『伊藤痴遊全集』17巻「海援隊の回顧」（関義臣懐旧談）より抜粋して意訳》

episode 2

## 密航と遭難、死刑囚と男爵、大逆転続きの生涯

慶応3（1867）年、自分の目で西洋を見てみたいと考えていた義臣は、イギリスへの密航を決心します。龍馬の許しを得て、長崎にいるイギリスの商人グラバーの仲介で義臣は長崎を出航。しかし、船は台風にあい遭難。清（中国）の端の岬に漂着し、結局、一行は長崎に戻り、密航は失敗に終わりました。

イギリスへの渡航をあきらめた義臣は、その後、龍馬と土佐藩士の後藤象二郎に会い、大政奉還の建白書について協議。義臣が筆をとり、土佐藩の儒者が手を入れた建白書は、土佐藩主の山内容堂を介して将軍慶喜に渡され、ついに京都二条城での大政奉還に至ったのでした。

その後の義臣は、明治元（1868）年、新政府の官吏として理化学技術の研究を行う大坂舎密局の局長に就任しましたが、福井藩は、藩の許可を得ていないことを理由に義臣を捕縛し、府中の実家に幽閉します。

そして、幽閉中の明治3（1870）年、武士を含む民衆による「武生騒動」と呼ばれる暴動が起こると、福井藩は義臣がそれに関与したとして死刑を求刑。しかし、新政府によって釈放され、その後は新政府の重職に就き、徳島県や山形県の知事、貴族院勅選議員などを歴任。明治40（1907）年には、男爵の爵位を授与されました。

激動の時代の荒波にもまれながら、藩に背いてでも信念を貫いた義臣。その一生は、ドラマチックなまでに大逆転を繰り返した生涯でした。

※昌平坂学問所…江戸幕府直轄の教育機関
※大坂舎密局…理化学技術の研究・教育、および勧業のために作られた機関

check for 関 義臣


加来耕三『海援隊異聞　海防から商社へ』時事通信出版局
『越前市史』越前市
土居晴夫『海援隊隊士列伝』新人物往来社
『武生古文書覚』武生古文書の基礎学習会
『越前市史編さんだより』第５号　越前市史編さん委員会
吉元吉之助『たけふ今昔アラカルト』
関義臣『秋声窓詠草鈔』関義寿
『福井県史』通史編５近現代一　福井県


こぼれ話

イギリスへの密航の際、台風に遭遇した時のことを義臣は、次のように語っています。「船は九天に上り、又は奈落に落ち、一同にわかに勇を鼓して、のこれる一台のポンプで水を吐きだしている。水は一滴も飲まず、食事は一切せず、空腹と疲労とで、わしと宍戸の両人も日本男児じゃと、勇気もどこへやら、大いに閉口した。」

# 木戸松子（幾松）

1843年～1886年

**元小浜藩士の娘。木戸孝允の妻。京都で芸妓をしていた時桂小五郎（木戸孝允）を助け尊王攘夷運動を支援。**

どんな子だった？

## 小浜藩士であった父の失踪後、京都で舞妓に

幾松（木戸松子）の父は、小浜藩主の酒井忠義（P.10参照）に仕える木崎市兵衛、母は神子浦（三方上中郡若狭町神子）の医師細川益庵の娘。幼い頃は計といい、幾松は芸妓としての名前で、後に木戸孝允と結婚して松子と改名しています。

子どもの頃は、父の失踪により母とともに母の実家に戻り、神子浦で過ごしたとされます。その後、京都に出て、14歳で三本木（京都市上京区三本木通）の舞妓になり、やがて二代目「幾松」を襲名。有名な芸妓へと成長していきました。京都に出たのは父を捜すためともされますが、諸説があり、詳しくはわかっていません。

episode 1

## 幾松と桂小五郎、激動の幕末に咲いた恋の花

尊王攘夷運動に奔走した桂小五郎（木戸孝允）と幾松のロマンスは、幕末を題材にした小説や映画、ドラマなどによく登場し、その中で幾松は気丈な芸妓として描かれています。そうした幾松の人物像について『幕末の志士を支えた「五人」の女』（由良弥生著）は次のように紹介しています。

> 幾松は舞が上手なうえ、武家娘の気品がただよい、凛とした姿勢を崩さない。三本木いちばんの売れっ妓になるのに時間はかからなかった。（中略）
>
> 京都三本木の芸妓幾松といえば、京娘たちが見ほれて吐息をもらすほど粋で、器量がよかった。

《由良弥生著『幕末の志士を支えた「五人」の女』より》

幕末、京都のまちには、倒幕派や佐幕派（幕府側）といった対立する者同士が入り乱れ、暗殺や襲撃事件などが頻繁に起こっていました。そんなある日、幾松と長州藩士の桂小五郎は出会います。幾松19歳、桂小五郎29歳の時のことでした。幾松が舞妓として座敷に出ていた三本木の吉田屋は、長州藩の志士たちがよく利用する料亭でした。

その頃、小五郎は長州藩の外交を担当し、京都に赴いて長州藩の志士たちによる尊王攘夷活動を指導していました。しかし、文久3（1863）年に起こった八月十八日の政変※（文久の政

ゆかりの地
（県内）小浜市　若狭町神子
（県外）京都府京都市
兵庫県豊岡市出石町
山口県下関市

写真提供：山口県立山口博物館所蔵

変）によって、長州藩勢力は京都から追放され、翌年、勢力を回復するために京都に攻めのぼります。この禁門の変（蛤御門の変）で長州藩が敗れると、小五郎は京都に潜伏し、新撰組などの詮索が厳しくなると但馬国出石（兵庫県豊岡市出石町）に亡命。こうした動きの中で幾松は、小五郎の命を救い、追われる身の小五郎を支え続けます。

さて、長州は多数の有能な志士を亡くし、大打撃を受けたが、村塾※の逸材、桂小五郎（後の木戸孝允＝一八三三―七七）は、愛人の命がけの保護により、但馬（兵庫県）出石へ逃れることができ、無事だった。木戸は維新後、参議となり薩摩の大久保利通、西郷隆盛とともに、維新の三傑と称された人物である。

その木戸を救った女性を長州人は忘れることができない。

《足立尚計著『ふくい女性風土記』より》

小五郎の京都での潜伏中には、新撰組が踏み込んだ際に幾松の機転で小五郎を匿ったり、新撰組の屯所に引き立てられても白状しなかったという話や、二条大橋周辺に潜む小五郎に握り飯を運んだという話があります。その全てが事実かどうかは不明ですが、愛する人のため、自身の危険を顧みない女性であったのは間違いありません。禁門の変後、下関に身を寄せていた幾松は、長州藩が小五郎を呼び戻そうとした際、たった一人で出石へ小五郎を迎えに行っています。

episode 2

# 明治維新の礎づくりを陰で支えた妻

二人が結婚したのは明治維新前後と考えられ、幾松はいったん長州藩士の養女となって松子と改名してから、小五郎の妻となっています。小五郎はその頃、新政府の立ち上げに関与し、維新直前の慶応4（1868）年には、福井藩士の由利公正P126参照が作った「議事之体大意」の草案を小五郎が最終的に整え、「五箇条の御誓文」が発令されています。

まさしく苦楽を共にした二人の夫婦愛は強く、松子は明治維新後も参議夫人として病弱であった木戸を支えた。

夫・孝允が西南戦争中の明治十年（一八七七）、四十五歳の若さで京都で病没すると、松子は髪を切って翠香院と称し、京都木屋町の木戸家別邸でひたすら夫の菩提を弔った。

《足立尚計著『ふくい女性風土記』より》

小五郎（孝允）の亡骸は、多くの幕末の志士が眠る京都霊山護国神社の墓地に葬られ、幾松は思い出深い京都の木屋町へ転居。その9年後の明治19（1886）年、波乱に満ちた生涯を閉じました。幾松の墓は夫が眠る墓の傍らに建てられ、小高いところにある墓地から今も二人仲良く京都の町を見下ろしています。

※八月十八日の政変…公武合体派が長州藩の尊皇攘夷派に敵対し、長州藩が破れる。
※禁門の変…長州藩が御所の蛤御門付近で、会津藩や薩摩藩の兵と戦い大敗した事件。
※村塾…松下村塾。

check for 木戸 松子


足立尚計『ふくい女性風土記』中日新聞社
松本民三『木戸松子傳』西京極郷土研究所
由良弥生『幕末の志士を支えた「五人」の女』講談社
美原研『幾松物語』文芸社
南条範夫『幾松という女』新潮社
水上勉『釈迦浜心中』新潮社
中島辰男『若狭路往還』洛西書院


ごぼれ話

維新後の木戸孝允（桂小五郎から改名）の日記からは、孝允が地方へ行く時も含めて、結婚後の二人はできるだけ一緒にいようとしていたことがわかります。また、松子のためにダイヤモンドの指輪を注文したり、夫婦で海外旅行を計画し、ドレスを準備したこともありました。旅行は孝允の死によって実現しませんでしたが、仲睦まじい二人の愛を物語るエピソードです。

ふるさと福井の先人100人

# ウィリアム・エリオット・グリフィス（William Elliot Griffis）

1843年～1928年

**ラトガース大学で日下部太郎に語学を指導。初の〝お雇い外国人〟として来福し福井藩の藩校で理化学を教える。著書を多く残し、アメリカの日本理解に貢献。**

どんな子だった？

## 東洋に憧れ、いつか行ってみたいと夢見ていた少年

グリフィスは、ペンシルバニア州フィラデルフィア生まれのアメリカ人。幼い頃は、海運業をしていた父から外国の話を聞くのが楽しみで、中でも東洋の話に心惹かれ、いつか行ってみたいと憧れていました。

ところが、幸せな一家を突然の不幸が襲います。父の会社が火災で全焼し、さらに不景気も重なって生活が苦しく、グリフィスは高校を中退して働き始めます。そして、南北戦争が勃発。北軍の兵士となった後、戦争経験から牧師への道を決意し、まず教養を身につけようと22歳でラトガース大学に入学。そこで幼い頃に憧れた東洋からきた人物に出会います。その名は日下部太郎。福井藩からの留学生でした。

episode 1

## 〝お雇い外国人〟として、憧れの東洋、その日本の福井へ

グリフィスは、ラトガース大学（ニューブランズウィック市）に通いながら、アルバイトとして大学付属の中等教育のための施設で教えていました。生徒の中には東洋人が何人かいて、中でも背筋を伸ばして真剣に授業に聞き入る日下部太郎（P.138参照）に、グリフィスは関心を持ちます。そして、その真面目な人柄に尊敬の念を抱き、太郎を通して日本に興味を抱きますが、太郎は肺結核に懼り、卒業前に亡くなってしまいます。ところがちょうどその頃、グリフィスに、日本の学校で教師をしないかという誘いがきます。しかも、勤務地は太郎の故郷、福井藩でした。

明治維新を迎えた日本では、教育を重視し、大学の創設などを行っていました。その統括長官が福井藩の藩主松平春嶽（P.124参照）でした。春嶽は、地元の福井でも洋学の強化のために、アメリカ人教師を〝お雇い外国人〟として招くことを考えました。そこで、かつて長崎で太郎や横井小楠（P.98参照）の甥たちを教えたアメリカ人に教師探しを依頼。その縁で日本人を教えた経験のあるグリフィスに、日本行きを求めたのでした。

1870年11月、グリフィスはアメリカを旅立ち、その年の12月末、横浜港に降り立ち、そして、福井へやってきました。

福井に到着した翌日の日記には、アメリカで亡くなった太郎の父に会ったことが書かれています。グリフィスは太郎の父に、大学から託されてきたファイ・ベータ・カッパの記章を渡します。それは一番の成績で卒業する者だけに与えられるもの

ゆかりの地
（県内）福井市
（県外）東京都
アメリカ合衆国ニューブランズウィック市

写真提供：福井市立郷土歴史博物館所蔵

で、太郎は卒業前に亡くなりましたが、群を抜いて優秀な成績であったため、特別に授与されたのでした。ちなみにグリフィスもその受賞者でした。

episode 2

## 多くの著書でアメリカに日本を紹介。その日本像は福井の姿

グリフィスの日記や手紙には、福井のことが頻繁に登場しています。福井の印象、人々との関わり、風習や宗教、侍の社会など、その内容は多岐にわたり、グリフィスの捉えた日本の姿として、随所に記述されています。

> 藩主、役人から学生、市民、子供にいたるまで、私を知って、にこにこしながらおじぎをして「お早うございます、先生」と挨拶してくれた人たちから受けた尊敬、思いやり、同情、親切しか、今は思い出せない。（中略）
>
> 古い文明を破壊するための新しい文明を持ってくるのを手伝いに、知識の建築者として私は福井に来た。しかし、因襲打破主義者になることは難しかった。しばしば自分に問うた。なぜこの人たちをそのままにしておいてはいけないのか。みんな充分に幸福そうだ。「知識を増す者は憂いを増す」というではないか。
>
> 《グリフィス著　山下英一訳『明治日本体験記』より》

また、著書『皇国』の中では、明治4（1871）年の廃藩置※県のことも記しています。グリフィス研究者の第一人者である山下英一氏は次のように述べています。

> 『皇国』における廃藩に対するグリフィスの歴史上の見方はおどろくほど正当であって、説明を加える必要がないと思われるので、次にその部分を訳して引用する。たしかにグリフィスは制度上、武士階級の弊害を除きミカドを中心とする統一国家への期待は喜ぶべきであったが、他方、武士の精神の支えであった武士道の消え去ることを惜しんだ。
>
> 《山下英一著『グリフィスと福井』より》

グリフィスは福井に1年間滞在し、その後、由利公正（P126参照）らの要請で大学南校（東京大学）に移ります。「食育」で知られる石塚左玄（P148参照）は、グリフィスの福井滞在中も東京に移った後も、助手を務めています。そして、2年後、グリフィスはアメリカに帰国。日本での経験を書き綴った『皇国』（The Mikado's Empire）がアメリカで出版されると、ベストセラーを記録しました。そこには、福井での出来事や美しい風景などが多く紹介されています。アメリカ人がグリフィスの著書を読み、思い描いた日本の姿は、実は福井の姿であったと言っても過言ではないでしょう。

※廃藩置県…明治4（1871）年、藩を廃して府県に改め、近代的集権国家体制が整えられた。

### check for ウィリアム・エリオット・グリフィス

グリフィス『明治日本体験記』（山下英一訳）平凡社
山下英一『グリフィスと福井』
山下英一『グリフィス福井書簡』
山下英一『グリフィスと日本』近代文芸社
『よみがえる心のかけ橋　日下部太郎／W.E. グリフィス』福井市立郷土歴史博物館
R.A. ローゼンストーン『ハーン、モース、グリフィスの日本』（杉田英明・吉田和久訳）平凡社
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第5集　青少年育成福井県民会議
『これき人物シリーズ3　ふくいの先人たち　幕末』福井県立こども歴史文化館

こぼれ話

日下部太郎やグリフィスが通ったラトガース大学のあるニューブランズウィック市と福井市は、二人の友情の縁をもとに、1982年、姉妹都市提携を結びました。以来、太平洋を隔てた二つの市は、互いにジュニア大使を派遣するなど、毎年、交流を行っています。

# 日下部太郎（くさかべたろう）

1845年～1870年

**藩主の期待を背負って長崎へ遊学後アメリカのラトガース大学に入学。グリフィスと友情を結ぶ。卒業前に病死。大学は最優秀の証しを授与。**

どんな子だった？

## 厳しい父のもと、努力を惜しまず頑張り抜く少年に成長

日下部太郎はもとの名を八木八十八（やぎやそはち）といい、福井藩に仕える八木郡右衛門の長男として、福井城下の江戸町（福井市宝永4丁目）で生まれました。父は礼儀や武芸、学問を八十八に教え、厳しくしつけました。そうした父のもと、幼い頃から書物に親しみ、10歳の頃には漢文の書物を読める賢い子どもに育った八十八は、本来なら15歳で入学する藩校の明道館（めいどうかん）（後の明新館、県立藤島高校）に13歳で入学しました。明道館は、福井藩の学校として藩主の松平春嶽（まつだいらしゅんがく）が創設したもので、橋本左内（はしもとさない）P30参照が学監（がっかん）を1年間務めていました。左内はその後、安政の大獄で刑死。八十八は、その志を受け継いだかのように、勉学に励んでいきます。

episode 1

## 長崎で西洋の学問を学び、そして、アメリカへ

成績の優秀な八十八は、藩主の松平春嶽（まつだいらしゅんがく）P24参照に認められ、慶応元（1865）年、21歳の時、西洋の学問を学ぶために藩の命令で長崎へ遊学※します。春嶽は、外国の優れたところを吸収して日本を早く外国と肩を並べる国にするべきという考えを持っていました。そのために優秀な人材を育てることに力を入れていたのです。

八十八は、アメリカ人宣教師フルベッキが校長を務める幕府直轄の洋学所に入学し、英語や数学を学びます。

長崎での太郎について『よみがえる心のかけ橋―日下部太郎／W・E・グリフィス―』では、次のように語っています。

ここでも八十八は、歯をくいしばって勉強し、全国から集まったどの学生にも負けないとびぬけた成績を修め皆をおどろかせました。

しかし、向学心に燃える八十八はそんなことで満足するような青年ではありませんでした。もっと大きな夢（ゆめ）を抱（いだ）いていたのです。できれば実際に海外へ渡って、もっと深く、もっと多くの知識を身につけたいと思うようになっていました。

《福井市立郷土歴史博物館編『よみがえる心のかけ橋―日下部太郎／W・E・グリフィス―』より》

ゆかりの地
（県内）福井市
（県外）東京都
アメリカ国ニューブランズウィック市

写真提供：福井市立郷土歴史博物館所蔵

慶応2（1866）年8月、八十八はアメリカへ渡る決意を胸に郷里の福井へ戻り、藩に海外渡航の願いを提出。藩はその翌月、八十八を藩の海外留学生とすることを決定しました。

アメリカに向かう際、八十八は、名前を日下部太郎に変えています。「日下部」の姓は祖父の姓を継いだわけですが、日の本の国で新しい国家づくりをするイメージが強く感じられる名前です。「太郎」は日本を代表する長男の名前。日下部太郎という名からは、日本のために役立ちたいという強い決意がうかがえます。

episode 2

## アメリカの大学でトップの成績に。しかし…

慶応3（1867）年2月13日、太郎は長崎を出航。ラトガース大学のあるニューブラウンズウィック市についたのは、7月13日のことでした。

太郎は、大学に入学する前に、大学付属のグラマー・スクールに入り、まず英語と基礎教育を受けます。そこには、福井藩主の補佐役を務めていた横井小楠（P98参照）の2人の甥（熊本藩士）をはじめ、長崎の洋学所で一緒に学んだ仲間もいました。小楠の甥たちは、太郎より一足早く密航して来ていたのです。

グラマー・スクールに入った太郎にラテン語を教え、時には厳しい先生として、また、温かい友人として、励ましてくれたのが、太郎より2歳上のグリフィス（P36参照）でした。グリフィスは後に福井藩の藩校へ招かれ、化学などを教える教師になっています。

勉強熱心な太郎はここでも秀才ぶりを発揮し、翌年には、いきなりラトガース大学の2年生からスタート。大学でも成績はどんどん上がり、クラスのトップにまでなり、また、誠実で礼儀正しく、明るい太郎の人柄は誰からも好かれていました。そんな太郎のことをグリフィスは、後にこう記しています。

> 彼は有能な青年であり、研究心に燃える立派な、明朗な性格の持ち主であった。私は、心ひそかに敬意をはらい、深く日本の国風をあこがれるにいたった。
>
> 《福井市立郷土歴史博物館編『よみがえる心のかけ橋―日下部太郎／W・E・グリフィス―』より》

しかし、太郎のアメリカ生活は、金銭的には非常に苦しいものでした。留学費は藩から出ていましたが、高価な本代などをつくるために、生活費を切り詰めていた太郎は、次第に体調を崩していきます。そして、卒業まであと1年という時太郎は病に倒れてしまいます。当時は治すことができなかった肺結核でした。太郎は入院しますが、病室でも勉強を続け、そして、ついに明治2（1870）年4月13日、26歳の短い生涯を閉じました。

大学はその成績と素晴らしい人格を讃えて、卒業を待たずして亡くなった太郎に卒業資格を与え、さらに最優秀の生徒に贈られるファイ・ベータ・カッパ※会員の証しである金の鍵を授与しました。その金の鍵はグリフィスが来福した際に太郎の父に渡されました。

※遊学…よその土地へ行って勉強をすること
※ファイ・ベータ・カッパ…成績優秀な大学卒業生からなる米国最古の名誉ある会員組織

### check for 日下部 太郎


グリフィス『明治日本体験記』（山下英一訳）平凡社
山下英一『グリフィスと福井』
山下英一『グリフィス福井書簡』
山下英一『グリフィスと日本』近代文芸社
『よみがえる心のかけ橋　日下部太郎／W.E. グリフィス』福井市立郷土歴史博物館
永井環『新日本の先駆者　日下部太郎』福井評論社
『日下部太郎　W・E・グリフィス』歴史のみえるまちづくり協会
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第3集　青少年育成福井県民会議
『これき人物シリーズ3　ふくいの先人たち　幕末』福井県立こども歴史文化館


こぼれ話

子どもの頃、近所の子どもたちと神明神社のお祭りに行き、高い塀の上から落ちて足に大けがをしたことがありました。10歳で漢文を読みこなす賢い子でしたが、引きこもって本ばかり読んでいるのではなく、川で泳いだり魚を獲ったりと、普通の子どもとかわらない元気な少年でした。

# 細井順子（ほそいじゅんこ）

1842年～1918年

**産業の近代化が進む明治初頭、県費研修生として京都府勧業場織工場でバッタン機の技術を習得。福井の繊維産業の発展に貢献。**

どんな子だった？

## 手仕事が上手で村の評判になった少女

江戸時代の終わり頃、順子は足羽郡下六条村（福井市下六条町）の農家の長女として生まれました。かつて農家の女の子は、幼い頃から糸紡ぎや手織りを覚え農作業の他に糸紡ぎや手織りで家計を助けました。順子も同様にそれらを覚えますが、もともと手先の器用な順子は、裁縫も織物もめきめき上達し、村の評判になるほどでした。

成長した順子は、やがて呉服や雑貨など商う細井万次郎に嫁ぎ、細井姓となります。そして、いわゆる普通の主婦だった順子に、大きな転機が訪れます。少女時代から得意であった手織りが、その人生を大きく変えていくのでした。

episode 1

## 期待を一身に背負い、京都府勧業場織工場へ

幕末の福井藩は富国策として繊維産業の発展に力を注ぎ、また、明治になると、高度な織機の導入や大規模化などを行い、福井県の繊維産業はいっそう発展を遂げていきます。そうした近代化の始まりの頃、福井の繊維産業の母ともいうべき役割を果たしたのが順子でした。

明治9（1876）年、順子は新しい織機の技術を学ぶ県費研修生2人のうちの1人に選ばれます。フランス製のバッタン機と呼ばれる織機は、操作がとても難しいため、手織りの技術で評判の順子ならと大きな期待が寄せられたのでした。順子は京都府勧業場の織工場に入り、輸出向けの広幅の布が織れるバッタン機の操作技術を学び、短期間で完璧にこれを習得。福井に戻ると、発足したばかりの織工会社の教師となり、学んだ技術のすべてを多くの人に教えました。

> ちょうどこの明治十年八月に、東京で第一回内国勧業博覧会が開かれ、それに先立って五月には、福井で勧業博覧会が開かれた。（中略）福井市東本願寺別院境内の会場は、当日大変な人出であった。順子の実演を一目見ようとかたずをのんで見守る中、順子はバッタン機を巧みに操り、見事に布を織り出していく。それまで日本で使われていた大和機の四倍の力で織り上げていくバッタン機の威力に、人々は感嘆の声を上げた。
>
> 《ふくい女性の歴史編さん委員会編『ふくい女性の歴史』より》

ゆかりの地
（県内）福井市
（県外）京都府京都市

写真提供：福井市立郷土歴史博物館所蔵

episode 2

# 地場産業の近代化を支えた〝福井の繊維産業の母〟

勧業博覧会で好評をはくした順子には、織工場でのいそがしい日々が始まった。女工たちに、バッタン機を使った織りかたを教えるのが、順子の仕事であった。バッタン機一〇台を備えたこの工場では、綾織（もようを浮き出させる織りかた）のハンカチーフ地、綾織かさ地などの製織を始めていた。しかし、織工はだれもが、バッタン機に初めて手をふれるものばかりである。しかも、西欧の機械文明がようやく日本に上陸したばかりで、工学全般が、非常におくれている時代であったから、一つ一つの道具が不完全なものばかりであり、機械に故障が起こっても、これを修繕する道具もなければ、技術者もいないというありさまである。このようななかで、織りかたを教え、製品を織りあげていくということは、気の遠くなるような、根気のいる仕事であった。

「先生、杼が動きません。」「先生、糸が切れます。」「先生、送り出し機の具合が悪いのですが。」

初めてバッタン機にとり組んだ織工たちは、毎日悲鳴をあげて順子に助けを求めた。（中略）

設備のよい京都の工場にくらべ、ようやくできたばかりのこの織工場では、伝習時代に予想もできなかった問題が毎日新しく持ちあがり、伝習してきた知識と技術だけでは追いつかないこともあった。そんな時順子は、持ち前のかんのよさを働かせ、京都で習ったことをヒントに、いろいろ応用したり、工夫したりしながら、きびきびと働いた。

《青少年育成福井県民会議編『若越山脈 第4集』より》

現代とは違って専門の修理業者もなく、専用の道具もない時代に、順子はいくつもの困難を乗り越え、さらに品質の改良にも精魂を傾け、成果をあげていきます。

第二回内国勧業博覧会が、一八八一年（明治一四年）三月一日から開かれることになった。バッタン機で織りあげた福井のかさ地やハンカチーフを、日本全国に認めてもらい、販路をひろげるためには、絶好のチャンスである。（中略）

伝習生として京都へ派遣されることをひき受けた日から、順子の胸にいつも渦まいていた使命感が、また激しく脈うち始めた。（中略）

やがて、日本全国から出品されたさまざまな製品の審査が行われ、その結果が発表された。順子たちの出品した越前かさ地、絹のハンカチーフは、「優等賞」という賞を受けることにきまった。

《青少年育成福井県民会議編『若越山脈 第4集』より》

順子のこうした働きによってバッタン機の技術が広まり、福井県は、全国一の広幅の輸出羽二重産地となっていきました。

## check for 細井 順子

『ふくい女性の歴史』福井県
田中光子『新・ふくい女性史』勝木書店
『足羽ゆかりの先人たち』福井市足羽公民館
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第４集　青少年育成福井県民会議
『これき人物シリーズ５　ふくいの先人たち　近現代』福井県立こども歴史文化館

**こぼれ話**

福井の織物業の近代化は、廃藩置県で身分を失った士族を中心とする民間人の手に委ねられ、そして、誕生したのが織工会社でした。織工会社は、順子が教えたバッタン機の技術を土台に、その後、羽二重織物が福井県に広がる牽引役を果たしました。

# ジョージ・アルノルド・エッセル（George Arnold Escher）

1843年～1939年

**オランダ人の土木技術者。九頭竜川河口の三国湊（みなと）に明治三大築港の一つとされる通称エッセル堤を設計。**

どんな子だった？

## 運河の町に育ち、世界最高水準の土木工学を学ぶ

エッセルの母国オランダは海抜0m以下の土地が多く、古くから盛んに干拓が行われ、土木技術を発達させてきました。エッセルの故郷、北海沿岸に位置するハーグもまた、いたるところに運河のある街として知られます。

エッセルは土木工学を志して、1859年、現在のデルフト工科大学の前身、オランダ王立アカデミーに入学。治水工事や運河建設などの水利工学を専攻しました。卒業後は1867年から水政省公共事業局職員として勤めた後、1873年、30歳の時に明治新政府に招かれて来日。日本各地で河川改修などの技術指導や設計にあたりました。

episode 1

## 政府から三国へ派遣されたオランダ人土木技術者

九頭竜川の河口にある三国湊は、その地の利によって日本海と九頭竜川を通じた交易の港として栄えていましたが、毎年のように上流からの土砂が河口に堆積し、川の氾濫や船の出入りを阻害するという問題を抱えていました。海運などで財を成した豪商たちは、その改善に資金を出し合うことを決めて、県に改修工事を要望。そして、政府から派遣されたのがエッセルでした。明治9（1876）年5月、三国湊へ到着したエッセルは、初めて訪れた三国の印象や体験を、後に出版した回想録にこう記述しています。

福井は家数にして約1万軒。従って、その人口は約5万人ぐらいであったろうか。私は、その福井の幾分街はずれの、丘の中腹にある田舎家に寄宿することになった。（中略）

私の宿のある丘の頂上からは、山頂に雪をかぶった加賀の国の「しろやま」（白山）の美しい姿がながめられた。（中略）

私がこの越前地方に滞在している間に見たり経験したりしたいろいろなことがらの中で、今もなお心に残り特筆に値すると思えるものを次に述べたい。

何人かの商人達に招待され、私達は安島浦へ出かけていった。そこは、海に張り出した険しい断崖になっており、高さ約800フィートの柱状の粗面の斑岩でできていた。約20人の婦人達が海上約90フィートまで、これらの岩壁を降りて行き、そ

ゆかりの地
（県内）坂井市三国町
（県外）オランダ南ホラント州ハーグ
大阪府淀川　鳥取県千代川
東京都江戸川　千葉県利根川ほか

写真提供：淀川資料館所蔵

こから海に飛び込み海底に潜って行く。そして、海底から、軟体動物と貝類、すなわち"さざえ""なまこ""あわび"（またの名を真珠貝、別名海の耳とも呼ばれる）などを拾い上げ、海面まで持ち上がって来る。それらを私達はフライにして食べた。

《龍翔館編『蘭人工師エッセル　日本回想録』より》

episode 2

# オランダの工法で築かれた三国の港

エッセルが計画した工事は、河口右岸に弧を描く形の突堤（とってい）をつくり、左岸は流れを中央に集めて速くするために、石積みを何ケ所も築くというものでした。石積みにはオランダで発達した工法が日本で初めて用いられ、使用する岩は東尋坊（とうじんぼう）で採石して船で運ぶことになりました。

明治11（1878）年5月、工事に着手。エッセルはほどなくオランダへ帰国しますが、工事は同じくオランダ人技師のデ・レーケに引き継がれます。デ・レーケはエッセルと往復書簡で相談しながら工事を進めました。回想録の中には次のような記述も見られます。

先に述べた防波堤を訪問した時、私が夏の間に、その川に沿って指示をしておいた14の場所で、現在工事が推し進められていることを耳にし、私としてはとてもうれしい気持ちであった。また、住民達がその工事を大変喜んでいることも明らかであった。

12月6日、港湾に関係している役人や商人達の全ての人に、私の方から要請して集まってもらい、そこで私は、図表などを用いて彼等に状況の説明を行った。そして、彼等に対し（工事）遂行にあたっては、西洋人の職工長を雇うこと、また、日本人を雇うなら少なくとも、例えば、海上航路の航海士として乗り込んだ経験を持っているというような専門家を雇うことが望ましいことを指摘しておいた。

《龍翔館編『蘭人工師エッセル　日本回想録』より》

工事は荒波による損害箇所が続出するなど、たいへんな難工事となり、ようやく完了したのは明治15（1882）年のことでした。

その突堤は、今も防波堤と導流堤の機能を果たし続け、明治三大築港の一つに数えられるとともに、国の重要文化財指定や経済産業省近代化産業遺産認定などを受け、歴史的に貴重な建造物となっています。

また、エッセルは港の他にも三国に大きな足跡を残しています。三国滞在中に小学校建設の計画が持ち上がると、町の有力者たちはそのデザインをエッセルに依頼したといわれます。そして、明治12（1879）年、九頭竜川河口の高台に木造五層八角形の校舎が完成。その学校名は旧福井藩主松平春嶽（まつだいらしゅんがく）P.24参照が龍翔小学校と命名したといわれます。この時の校舎は、老朽化により大正時代に取り壊されましたが、昭和56（1981）年に、外観を復元した建物が建設され、博物館として蘇っています。その博物館には、エッセルとの縁から、その息子で「だまし絵」の作家として有名なエッシャー（マウリッツ・エッセル）の作品を展示しています。

## check for ジョージ・アルノルド・エッセル


みくに龍翔館（三国町郷土資料館）編『蘭人工師エッセル日本回想録』三国町
『明治三大築港展』みくに龍翔館
『九頭竜川河口の三国港とエッセル、デ・レーケの技術、人間性』ドラゴンリバー交流会
M・C・エッシャー『無限を求めて　エッシャー、自作を語る』（坂根厳夫訳）朝日新聞社
『M.C. エッシャー　その生涯と全作品集』（J・L・ロッヘル編、坂根厳夫訳）メルヘン社
『港湾遺産』（合田良実監修）日本埋立浚渫協会
『これき人物シリーズ5　ふくいの先人たち　近現代』福井県立こども歴史文化館


こぼれ話　エッセルの帰国後、現場を指揮したデ・レーケは、突堤などの名称に名を残してはいませんが、オランダ人技術者の多くが帰国した後も日本に残り、日本の土木技術の近代化に尽くしました。

# 渡辺洪基

1847年～1901年

**岩倉遣外使節団に随行し欧州を視察。外交官、第9代東京府知事、帝国大学初代総長国会議員などを歴任。鹿鳴館での親善外交でも手腕を発揮。**

どんな子だった？

## 恐ろしい伝染病の天然痘の撲滅に、3歳の洪基が貢献

洪基は、江戸時代の終わり頃、越前国府中（越前市）の医師渡辺静庵の長男として生まれました。父は、笠原白翁（P100参照）とともに越前に種痘を広めた人物としても知られ、洪基は3歳の時、越前で初めて種痘を受けました。それは、生きたままの痘苗を運ぶための中継ぎ役であり、効果を証明するためのものでもあったのです。

6歳から漢文と書道を習い、10歳の時に府中の「立教館」に入学。その後、福井藩の医学所で学び、18歳で江戸へ出て、医師の佐藤舜海に師事。父の跡継ぎとしての道を歩む洪基でしたが、その興味は、次第に西洋の学問や政治へと向かいました。

episode 1

## 福沢諭吉に洋学を学び、やがて外交官へ

医学を学ぶために江戸に出た洪基は、外国人にオランダ語が全く通じなかったことにショックを受け、福沢諭吉の塾に入り、英語の勉強にも力を入れ始めます。諭吉は、その才能を認め、19歳の洪基を慶応義塾の講師に抜擢。そして、22歳の時、会津（福島県会津市）に英学校を開きました。

明治元年、彼は会津へ行ってそこで英学校を開いた。二十二歳のときである。ところが間もなく会津征伐がはじまり、渡辺洪基も会津藩の防戦隊に加わったことから朝敵※のラク印を押された。翌年こっそり江戸へのがれたが、追及の手がきびしく、ついに建白書を維新政府へ提出して、疑いを晴らすことができたという。まことに波乱に満ちた青年時代であった。

彼は英語ができたことが幸いしたのであろう。明治三年（二十四歳）政府の要請で外務省へはいり翌四年、全権大使岩倉具視らの一行に加わって欧米に出かけた。おくれて明治五年に参加した由利公正（P126参照）（当時の東京府知事）とも、あるいは同じ時期外国で顔を合わせていたのではないかと想像されるが、アメリカで意見が対立したため、洪基は七月単身帰国してしまった。一徹な性格があらわれている。

明治六年、庄司平五郎の長女貞子と結婚、すぐイタリア、オーストリア公使館（公使は佐野常民）勤務となったが、このとき彼は妻を同伴して赴任した。そのころ若い外交官で夫人同伴で

ゆかりの地
（県内）越前市　福井市
（県外）東京都

写真提供：渡邊宏次氏所蔵

外国へ赴任するものはほとんどなかったが、洪基はすでに婚約中から準備していた。

《福井新聞社編『福井人物風土記』より》

妻の貞子は、ウイーンの社交界から豊かな才能の持ち主と称賛され、喝采を受けたことが、オーストリアの男爵の回顧録に記されています。洪基の妻は期待以上の活躍を見せたのでした。

episode 2

# 東京府知事から、帝国大学（東京大学）初代総長に就任

明治18（1885）年、洪基は39歳の若さで第9代東京府知事に就任。翌年に帝国大学（東京大学）総長となるまでの短い任期でしたが、知事時代は、就任直後に東京を襲った大洪水の災害に対して直ちに被災地を巡り、復興に力を尽くします。また、外国の大都市にならい、東京にも都市を象徴するマークの導入を決定。明治22年にマークのデザインが決まり、今も東京都の正式な紋章として使われています。

また、初代内閣総理大臣の伊藤博文は、外国の大使夫妻らを鹿鳴館※に招いて晩餐会や舞踏会を開催し、西洋の社交界を知る洪基に親善外交を命じました。いわゆる鹿鳴館外交を推進する役割を洪基が担い、日本が文明国であることをアピールしたのでした。

そして、明治19（1886）年、帝国大学の初代総長になると、足かけ5年間、具体的な運営や組織の整備などに力を注ぎます。明治時代の帝国大学について記した『東京大学物語　まだ君が若かったころ』では、当時の洪基についてこう述べています。

東京大学教職員以外の行政官僚が、総長（総理）に就任したのは渡辺洪基を措いてほかにいない。彼は最初で最後の異色の総長であった。（中略）在職期間は歴代総長のなかで決して短くはなく、長いほうに属する。また帝大内部にとくに親しくしていた人間がいたとも聞かない。草創期の五年間、彼は孤軍奮闘に近い状態だったのかもしれない。五年間の彼の事蹟、起こった出来事を数えると、草創期の帝大の「父」とも「母」とも呼ばれていい。

《中野実著『東京大学物語　まだ君が若かったころ』より》

洪基は、文部省からの指示通りに職務をこなすだけの総長ではありませんでした。積極的に様々な策を講じて実施していきます。当時の日本はまだ貧しく、優秀な若者であっても大学へ通う費用がなく、入学者が少ないという問題もありました。洪基は、帝国大学が国の発展に重要であることを官公庁や企業に説き、学費支援の要請にも奔走しています。

また、工手学校の設立や政友会の創立など、洪基は生涯を通じて、政治、外交、教育の多彩な分野で能力を発揮し、文明開化の日本を世界水準に押し上げる様々な業績を残しました。

※朝敵…朝廷にそむく賊（敵）。
※鹿鳴館…東京の日比谷に政府が設けた官設社交場。欧化主義の象徴とされる。

## check for 渡辺 洪基


『知識による国づくり　渡辺洪基の見た夢』（瀧井一博講演）ラピュタ創造研究所
渡辺進編『夢　渡辺洪基伝』
文殊谷康之『渡邉洪基伝　明治国家のプランナー』ルネッサンスブックス
『渡邉洪基先生没後百年記念』（パンフレット）
プロジェクト武生21 渡邉洪基没後百年記念実行委員会・武生郷友会
中野実『東京大学物語　まだ君が若かったころ』吉川弘文館
福井新聞社編『福井人物風土記』昭和書院
『福井県史』通史編中世　福井県
『若越山脈　郷土に光を掲げた人びと』第Ⅰ集　青少年育成福井県民会議
『これき人物シリーズ5　ふくいの先人たち　近現代』福井県立こども歴史文化館
『大隈重信関係文書　Ⅱ』みすず書房


こぼれ話

昭和7年に出版された福沢諭吉の伝記『福沢諭吉伝』に、諭吉と塾生の親密さを語るエピソードとして、洪基ら塾生が密かに福沢家の鏡餅の中身だけをくり抜いて食べ、外側だけをもとの通りにして飾ったという話があります。洪基は、いたずらな知恵も持ち合わせた学生でもあったようです。

# 吉田健三（よしだけんぞう）

1849年～1889年

**元福井藩士。実業家。昭和期の総理大臣吉田茂（よしだしげる）の養父。数々の事業に成功し大富豪となり、貿易都市横浜の発展に貢献。**

どんな子だった？

## 負けん気の強い少年は、やがて実業家を目指し海の向こうへ

健三は福井藩士の渡辺謙七（わたなべけんしち）（後に吉田姓）と、豪商三好助右衛門（みよしすけうえもん）の娘きよの長男として生まれ、福井で育ちました。

子どもの頃はたいへんに負けん気の強い性格で、仲間の少年たちから一目置かれる存在でした。ある日、仲間たちと山の中にある廃寺で米粉一合と水だけで耐える度胸試しをしたところ、最初の晩に仲間は逃げ出しますが、健三は一週間後に栄養失調で倒れているところを猟師に救われるまで耐え抜いたといいます。

数え年16歳になると大阪へ出て医者を目指し、次に長崎で英学を学んだ後、イギリス軍艦に水夫として潜り込んで海外へ。大胆な行動をやってのける青年へと成長していきます。

episode 1

## 近代化の波に乗り、一代にして莫大な富を築く

明治時代の横浜でずば抜けた商才を発揮した健三は、大富豪にまでのぼり詰めた人物でした。また、その養子となった吉田茂は、5期にわたり内閣総理大臣を務め、日本の戦後復興に尽くしました。茂の長男の吉田健一（英学者）の伝記では、祖父健三について次のように紹介しています。

吉田茂は明治十一年、土佐自由党の志士、竹内綱（たけのうちつな）の五男として東京に生まれ、三歳のときに実父の盟友である横浜市南太田町の吉田健三の養子となった。吉田健三は旧越前福井藩士、脱※藩して大阪で医学、長崎で英学を学び、のち英国軍艦で密航、二年間をヨーロッパやアメリカに遊学して過ごす。一八六八年に帰国後、一時、新潟に身を寄せたのち東京で英学塾を開き、明治五年、東京で最初の日刊紙となる「東京日日新聞」の創業に関わり、海外ニュースを担当した。同時に、開港場・横浜でジャーディン・マジソン商会横浜支店（英一番館）の通事となり、やがてその支配人を務める。同商会は、明治新政府を交渉相手とする英国資本の巨大商社。さらに、醤油醸造業や日本最初の電灯会社の設立に関わるなど、文明開化・横浜を代表する実業家の一人となり、地域振興に貢献した。ビールを最初に外国から取り寄せたのも吉田健三とされる。竹内綱との交友は、「東京日日新聞」が国会開設を主張して、自由民権運動を支援したことに由る。

ゆかりの地
（県内）福井市
（県外）神奈川県横浜市・中郡大磯町

養母は士子、江戸後期の儒者・佐藤一斎の孫にあたる。
明治二十二年十二月、健三は四十歳で急逝、茂は十一歳で家督を継ぐが、遺産は五十万円といわれる莫大なものであった。

《長谷川郁夫著『吉田健一』より》

健三には実子がいなかったために、吉田茂が健三から受け継いだ遺産は、現在の価値にして数十億円とされます。

一方、茂の回想録を元にした次の伝記では、首相時代の茂の姿と父健三の生き様が重なるように見えてきます。

健三も、家人に厳しかった。朝四時に起きると、使用人にてきぱきと仕事を命じる。早朝から来客が絶えなかったが、どれだけ高名な客を迎えても、自分が上座に座るのが健三の流儀であった。健三の強烈な自尊心と、国禁を犯してまで密航を果たした強烈なエネルギーを、茂は身近に感じながら成長していった。

《老川芳明著『熱血「ワンマン」宰相　吉田茂』より》

episode 2

# 横浜の発展の原点にいた健三ら福井人

横浜でジャーディン・マセソン※商会に勤めた健三は、新聞社時代に得た政界の人脈を巧みに使い、生糸や武器の商売で大きな利益を同商会にもたらしました。そして、勤め始めて3年で退職し、金1万円の慰労金をもらい、それを資金にして神奈川県大磯町に広大な土地を購入して邸宅を建てます。そして、その後も土地を買い足して大磯に海水浴場を設け、別荘地を販売。現代に続くリゾート地としての礎をつくりました。

また、横浜では宅地の開発や学校の新設など、街の発展に貢献しています。健三が活躍した横浜は、幕末から明治初期にかけて福井とたいへん深い繋がりを持っていました。幕末に福井産品を商う福井藩の「産物会所」の出張所ができたほか、岡倉P.68参照天心の父で福井出身の岡倉覚右衛門が営む「石川屋」をはじめ、多くの福井出身者が横浜で盛んな経済活動をしていたのです。

健三は横浜で成功していた越前市王子保出身の上郎幸八とともに、湘南から熱海にかけての別荘開発なども手がけています。

また、越前市粟田部出身で後に三秀舎という印刷会社を創立した嶋連太郎は、15歳の時、横浜に出て健三の世話になっています。嶋は健三の叔父が創立者の一人である印刷会社（大日本印刷の前身）に就職。実は健三をめぐる一族には、実業家や政治家、学者が多く出ています。母方の祖父は幕末に長崎で福井屋を営んだ豪商の三好助右衛門。健三の妹の子ども山本条太郎は実業家で衆議院議員。健三の養子の茂は敗戦後の日本の復興に尽くした内閣総理大臣（1946～47年、1948～54年）。茂の妻は福井県知事であった牧野伸顕の娘。茂の息子2人は学者。また、三女は麻生太郎の母。太郎は健三のひ孫にあたり、内閣総理大臣（2008～09年）ほか大臣を歴任。また、岸信介と佐藤栄作兄弟や、三木武夫、安倍晋三といった歴代総理も遠縁にあたります。まさにドラマのような華麗なる一族の家系が浮かび上がります。

※脱藩…武士が藩籍を抜けて浪人になること。
※家督…相続すべきその家の財産や事業など。
※ジャーディン・マセソン…英語の発音はマセソン。引用文中は原文に従いマジソンとしている。

## check for 吉田 健三


長谷川郁夫『吉田健一』新潮社
原彬久『吉田茂』岩波書店
北康利『吉田茂　ポピュリズムに背を向けて』講談社
老川芳明『熱血「ワンマン」宰相　吉田茂』生活情報センター


こぼれ話

健三が建てた大磯の邸宅には、こんなエピソードも…。吉田茂は少年時代を大磯の邸宅で過ごし、政界引退後に再びそこを隠居所として移り住みました。政界から退いても茂の政治的な影響力は大きく、多くの政治家が「大磯詣」と称してその吉田邸に通いました。

# 石塚左玄

1851年～1909年

**体育、知育、才育の基本として食の重要性と、あり方を説き「食育」を日本で初めて提唱 現代の食育基本法の生みの親**

どんな子だった？

## 知りたい、考えたいー。旺盛な研究心から生まれた食育の考え方

江戸時代の終わりに近い嘉永4（1851）年、左玄は福井城下で代々漢方医を営む家に生まれました。10歳の頃にはすでに漢方を勉強し、やがて藩の医学校に入学。その後、藩の病院に勤め始めた左玄に、大きな転機が訪れます。福井藩の学校「明新館」（県立藤島高校の前身）に、アメリカ人教師のグリフィスが赴任すると、左玄はグリフィスの助手となり西洋の化学を学びます。それが後に、日本の食材による食事療法を西洋の化学からひも解き、独自の理論を打ち立てる原点となったのでした。幼いころから体が弱く病気に悩まされてきた左玄は、食べ物による健康法を提唱し、「食育」という言葉をつくり、また、食事による病気の治療に生涯を捧げました。

episode 1

## 西洋の化学で日本の伝統的な食べ物を研究

左玄が生まれたのは、アメリカ海軍艦隊の総督ペリーが浦賀に来航する2年前。ほどなく日本が開国し、明治維新とともに押し寄せた西欧文明の波の中で、左玄は、それまで日本になかった化学や医学の新しい学問を吸収しながら青春時代を過ごしました。

明治4（1872年）に廃藩置県で藩の病院が廃止されると、左玄は、福井藩の元藩医で陸軍軍医の橋本綱常を頼って上京。そこで再びグリフィスに学び、また、文部省のお雇い外国人マルチン教授の助手になり、植物学や薬物学を研究しました。綱常は橋本左内（P130参照）の弟で、石塚家が橋本家と旧来の親しい間柄であったことから、綱常は上京した左玄を支えます。また、左玄の名前の「左」は、左内の一字をもらったものといわれます。

その後、左玄は綱常の引き立てで軍医試補（見習い）になり、西南戦争に従軍。明治29（1896）年に陸軍を退職し、それまでの研究をまとめた『化学的食養長寿論』を出版。健康づくりや病気の療養に有効な日本の食材を、化学的に検証した本は、大きな反響を呼びます。また、その中で、左玄がつくった造語の「食育」という言葉が、初めて用いられました。

> 子どもを養育する人々は、家庭の決め事として、体育も智育も才育も食育にあると、しっかりと心得なさい。
>
> 《『化学的食養長寿論』より現代文にて意訳》

ゆかりの地
（県内）福井市
（県外）東京都

写真提供：NPO法人フードヘルス石塚左玄塾所蔵

出版の翌年、左玄は東京の市ケ谷で「石塚食療所」を開設します。評判はうなぎのぼりで、医者に見放された人々が全国から集まり、門前には毎日数十台の人力車が停まり、順番待ちをする人々を相手に茶店や売店ができたほどでした。また、3年後には『食物養生法』を出版。明治40（1907）年には、左玄が提唱するその療養方法を実践する団体「食養会」が、政界や財界の人々、軍人らの支援を受けて設立されます。その発起人の一人には、左玄と同じ福井県出身の由利公正P.126参照もいました。

episode 2

## あだ名は〝大根先生〟

左玄は、糠がついたままの玄米が最も素晴らしいとして玄米食を薦め、病人には病気にあわせた食事療法と、漢方や療養法などを患者ごとに組み合わせて処方しました。

ある日のこと、胃酸過多症で医者から見放された患者が食療所にやってきたことがありました。左玄は、肉の食べ過ぎで消化のための胃酸が増えたと診断し、肉食を止めて玄米や大根、ごぼうなどの野菜を食べるよう指示します。すると、それを実践した患者は病気が治り、健康を取り戻しました。こうした左玄の治療は、多くの患者を癒し、人々は、尊敬と親しみを込めて左玄を「大根先生」と呼びました。それは、左玄が患者によく大根を薦めていたことと、大根が医者いらずと言われるほど効能があることを重ねた名でした。

左玄の提唱した「食養」の理念は大きく捉えると次の5つにわけられます。

■食養道…　心身は食によって作られ、食が人の健康を左右するというのが食養生の基本。

■人間は穀食動物…肉食動物や草食動物とは異なり、人はその歯や顎の形状から穀物を食べる動物。

■郷に入りては郷に従う…
住んでいる地域でとれる農海産物をそこに住んでいる人が食にする事は自然で心身に優しく、新鮮で栄養価値が高いため良い。

■陰陽調和…陽性のナトリウム、陰性のカリウムのバランスが崩れると病気になる。（左玄はナトリウムを陽性とし、カリウムを陰性とした）

■一物全体食…栄養は食べ物全体にあるため、なるべく丸ごと食べる全体食が良い。

《『化学的食養長寿論』より意訳》

肉食動物、草食動物、そして、人間は、それぞれ食べ物によって歯の形状や本数が異なることに着目した左玄は、人間を穀食動物と考えました。そして、当時、西洋の栄養学では軽視されていたミネラルのバランスを重視し、穀物の中で最も玄米が素晴らしいと玄米食を薦めます。その食事療法と漢方や療養方法を患者ごとに組み合わせた左玄の処方は、神技にも近かったといわれます。

### check for 石塚 左玄


岩佐勢市『食育の祖　石塚左玄物語』正食出版
『食医石塚左玄の食べもの健康法』（橋本政憲訳）農山漁村文化協会
『これき人物シリーズ5　ふくいの先人たち　近現代』福井県立こども歴史文化館


こぼれ話

明治天皇も左玄の『化学的食養長寿論』にたいそう関心を持った一人でした。その日常の食事は質素なもので、そこには、左玄の考え方が取り入れられていたといいます。